

CZ  
5  
0157

東 京 圖 書 館	
新 門	四 八 函
一 部	三 架
類	號

本邦  
現行  
法令  
提要

改根正夫編輯

下乙

CZ  
5  
0157



重慶十年七月十一日

三十一日

何

妻

子

女

十

家督相續

シキハ嫡庶

母戸籍肩書

嫡母ヲ嫡母

トシ庶母ヲ

生母ト記載

可然哉

指令二十年十一月

伺之通

別冊

戒嚴令

第一條 戒嚴令ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵備ヲ以テ全國若クハ一地方ヲ警戒スルノ法トス

第二條 戒嚴ハ臨戰地境ト合圍地境トノ二種ニ分ツ

第一 臨戰地境ハ戰時若クハ事變ニ際シ警戒ス可キ地方ヲ區畫シテ臨戰ノ區域ト爲ス者ナリ

第二 合圍地境ハ敵ノ合圍若クハ攻撃其他ノ事變ニ際シ警戒ス可キ地方ヲ區畫シテ合圍ノ區域ト爲ス者ナリ

第三條 戒嚴ハ時機ニ應シ其要ス可キ地境ヲ區畫シテ之ヲ布告ス

三名東縣年  
本邦法令局  
第三

七月二十五日同

當主養子ニ

テ妻ハ養家

ノ女ニ候處

不得止事故

アリ斷縁願

出候者有之

本年第十七

号御省日誌

千葉縣伺御

指令ニ基キ

聞届可然儀

ト存候得共

其妻ハ其家

ニ生レタル

者ナレハ終

第四條 戰時ニ際シ鎮臺營所要塞海軍港鎮守府海軍造

船所等遠カニ合圍若クハ攻撃ヲ受クル時ハ其地ノ司

令官臨時戒嚴ヲ宣告スルヲ得又戰略上臨機ノ處分

ヲ要スル時ハ出征ノ司令官之ヲ宣告スルヲ得

第五條 平時土寇ヲ鎮定スル爲ノ臨時戒嚴ヲ要スル場

合ニ於テハ其地ノ司令官速カニ上奏シテ命ヲ請フ可

シ若シ時機切迫シテ通信斷絶シ命ヲ請フノ道ナキ時

ハ直ニ戒嚴ヲ宣告スルヲ得

第六條 軍團長師團長旅團長鎮臺營所要塞司令官或ハ

艦隊司令長官艦隊司令官鎮守府長官若クハ特命司令

官ハ戒嚴ヲ宣告シ得ルノ權アル司令官トス

第七條 戒嚴ノ宣告ヲ爲シタル時ハ直ニ其狀勢及ヒ

身或ハ他ハ

縁付候迄其

家ニ差置カ

サルヲ得ス

然ル時ハ籍

面上如何可

相認ヤ相伺

候也

指令八年八

日ニ書面離

縁ノ上ハ他

人ト可相心

得事

但藉面上ハ

養父誰養女

ト可致記載

事由ヲ具シテ之ヲ太政官ニ上申ス可シ

但其隸屬スル所ノ長官ニハ別ニ之ヲ具申ス可シ

第八條 戒嚴ノ宣告ハ曩ニ布告シタル所ノ臨戰若クハ

合圍地境ノ區畫ヲ改定スルヲ得

第九條 臨戰地境内ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事

務ノ軍事ニ關係アル事件ヲ限リ其地ノ司令官ニ管掌

ノ權ヲ委スル者トス故ニ地方官地方裁判官及ヒ檢察

官ハ其戒嚴ノ布告若クハ宣告アル時ハ速カニ該司令

官ニ就テ其指揮ヲ請フ可シ

第十條 合圍地境内ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事

務ハ其地ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委スル者トス故ニ地

方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ其戒嚴ノ布告若クハ宣

事

三名東縣八  
三月二十  
三日伺  
雙子三子兄  
弟順序ノ儀  
前ニ産ル  
ヲ兄弟ト取  
極候趣太政  
官日誌ニ相  
見ハ御布告  
ハ無之候得  
共長次繼嗣  
ノ訴訟等有  
之節ハ右ニ  
準據シ裁判

告アル時ハ速カニ該司令官ニ就テ其指揮ヲ請フ可シ  
第十一條 合圍地境内ニ於テハ軍事ニ係ル民事及ヒ左  
ニ開列スル犯罪ニ係ル者ハ總テ軍衙ニ於テ裁判ス  
刑法

第二編

第一章 皇室ニ對スル罪

第二章 國事ニ關スル罪

第三章 靜謐ヲ害スル罪

第四章 信用ヲ害スル罪

第九章 官吏瀆職ノ罪

第三編

第一章

第一節 謀殺故殺ノ罪

第二節 歐打創傷ノ罪

第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪

第七節 脅迫ノ罪

第二章

第二節 強盜ノ罪

第七節 放火失火ノ罪

第八節 決水ノ罪

第九節 船舶ヲ覆没スル罪

第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

候儀ト相心

得申候然ル

片ハ右順序

ノ儀此際管

下ハ布達仕

度相伺候也

追テ本文取

極ノ儀既往

將來ノ區別

供テ相伺度

候

指令八年四

日 書面ノ

通可取計事

但既往ノ分

第十二條 合圍地境内ニ裁判所ナク又其管轄裁判所ト通

林部法 卷下 四

キ將來ノ順序相定儀ト可心得事

〔西〕廣島縣七

十一月二

一夫婦ノ際

不得止事情

有之離縁セ

ント欲スレ

氏妻ノ里方

斷絶外ニ親

戚等モ無之

且一戸相構

候力モ無之

依テ其妻離

路斷絶セシ時ハ民事刑事ノ別ナク總テ軍衙ノ裁判ニ屬ス

第十三條 合圍地境内ニ於ケル軍衙ニ裁判ニ對シテハ控訴上告ヲ爲スルヲ得ス

第十四條 戒嚴地境内ニ於テハ司令官左ニ記列ノ諸件ヲ執行スルノ權ヲ有ス但其執行ヨリ生スル損害ハ要償スルヲ得ス

第一 集會若クハ新聞雜誌廣告等ノ時勢ニ妨害アリト認ムル者ヲ停止スルヲ

第二 軍需ニ供ス可キ民有ノ諸物品ヲ調査シ又ハ時機ニ依リ其輸出ヲ禁止スルヲ

第三 銃砲彈藥兵器火具其他危險ニ涉ル諸物品ヲ所

縁上其儘先

夫ノ家ヘ附

籍致置追テ

本人他ヘ奉

公或ハ再縁

等ノ儀ハ不

苦儀ニ候ヤ

一右同斷其

妻離縁更ニ

引受候者無

之生村戸長

或ハ舊里方

ノ組合内ヘ

引受サセ候

様ニモ難相

成去ル至申

有スル者アル時ハ之ヲ檢査シ時機ニ依リ押收スル

第四 郵便電報ヲ開滅シ出入ノ船舶及ヒ諸物品ヲ檢査シ並ニ陸海通路ヲ停止スルヲ

第五 戰狀ニ依リ止ムヲ得サル場合ニ於テハ人民ノ動産不動産ヲ破壊燬焼スルヲ

第六 合圍地境内ニ於テハ晝夜ノ別ナク人民ノ家屋建造物船舶中ニ立入り檢査スルヲ

第七 合圍地境内ニ寄宿スル者アル時ハ時機ニ依リ其地ヲ退去セシムルヲ

第十五條 戒嚴ハ平定ノ後ト雖モ解止ノ布告若クハ宣告ヲ受クルノ日迄ハ其効力ヲ有スル者トス

四月太政官

御達ニ基キ

第十六條 戒嚴解止ノ日ヨリ地方行政事務及ヒ裁判權

徒場ニ留メ

ハ總テ其常例ニ復ス

罪人ト別異

徵發令ノ事

シ相當ノ使

徵發令別冊ノ通制定ス

役申付其内

右奉 勅旨布告候事

身元引受人

別冊

有之候ハ、

附籍同居ノ

徵發令

内ニ取極サ

第一條 徵發令ハ戰時若クハ事變ニ際シ陸軍或ハ海軍

セ若引受人

ノ全部又ハ一部ヲ動カスニ方リ其所要ノ軍需ヲ地方

無之候ハ、

ノ人民ニ賦課シテ徵發スルノ法トス

獨立活計相

但平時ト雖モ演習及ヒ行軍ノ際ハ本條ニ准ス

立望ノ地ハ

入籍願出候

近ハ其儘徒

第二條 徵發ハ陸軍若クハ海軍官憲ノ徵發書ヲ以テ之

場ニ差置可

然ヤ

ヲ行フ

指令八年四

第三條 左ニ記列スル官憲ハ徵發書ヲ以テ之ヲ行フ

日 書面第

一 陸軍卿海軍卿鎮臺司令官及ヒ鎮守府長官

一條 雙方

二 陸軍ニ於テハ特命司令官軍團長師團長旅團長分

協儀ニ任セ

遣隊長若クハ演習及ヒ行軍ノ軍隊長

可申事

三 海軍ニ於テハ特命司令官艦隊司令長官艦隊司令

第二條 附

官分遣艦長若クハ操練及ヒ航海ノ艦隊司令官又

籍ノ引受人

ハ艦長

無之候ハ、

其婦望ノ地

ノ戸長ニ於

テ其籍ニ編

入シ其名籍

第四條 徵發ス可キモノ、種類ニ依リ徵發區ニ准ス

ヲ定ム可シ

一 第十二條第一項ハ

其婦學生ノ

二 第十二條第二項及ヒ第三項ハ

府縣

郡區

其婦學生ノ

府縣

郡區

郡區

事ニ至テハ  
地方官ニ於  
テ一般貧民  
處置方ニ從  
ヒ取扱可申  
事

三 第十二條第四項以下各項及第十三條各項ハ 町村  
四 船舶會社所有、船舶及鐵道會社所有、漁業會社  
第五條 徵發ス可キモノハ徵發區内ニ現在スルモノニ  
限ル

○  
五長野縣年  
一月伺  
ノ内  
欠日ヲ

第六條 徵發書ハ徵發區ニ從ヒ府知事縣令郡區長戸長  
若クハ停車場長船舶會社ノ店長ニ付ス可シ

第二條 長

第七條 徵發書ヲ受ケタル府知事縣令郡區長戸長若ク  
ハ停車場長船舶會社ノ店長ハ時期ヲ誤ルコトナク其  
供給ヲ完全セシムルノ責アルモノトス

次男ノ實子  
アルモノ他  
ノ男子實受  
養子トナス  
時ハ戶籍列

第八條 各徵發區ニ於テハ臨時徵發ニ應ス可キ便宜ノ  
方法ヲ豫定ス可キモノトス  
第九條 徵發ヲ課セラレタルモノハ時期ニ違フコトナ

次ノ儀其年  
齡長次男ヨ  
リ長スルモ  
ノト雖正次  
男ノ次ニ列  
シ戶籍面左  
ノ通記載シ  
可然哉  
ニ男實養子  
何ノ誰  
國所職業何  
ノ其幾男

ク之ヲ供給スルノ義務アルモノトス若シ其時期ニ違  
フトキハ府知事縣令郡區長戸長他ノ方法ヲ以テ調達  
シ爲メニ生シタル費用ハ本人ヲシテ之ヲ辨償セシム  
但會社ニ係ルモノハ陸海軍官憲直ニ其處分ヲ爲ス可  
シ

第十條

徵發ヲ課セラレタルモノノ商用其他ノ事故ヲ以  
テ供給ヲ拒ミ又ハ供給ス可キモノヲ藏匿シタルトキ  
ハ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得

第三條 長

第十一條 供給ヲ受ケタル陸海軍官憲ハ其受領證票ヲ  
府知事縣令郡區長戸長若クハ停車場長船舶會社ノ店  
長ニ交付スヘシ

次女ノ實子  
アルモノ他  
ノ女ヲ養女

第十二條 徵發ス可キモノ左ノ如シ

二致候節モ  
前條ニ準據  
記載可然哉  
將夕年次ノ  
少長ヲ以テ  
順序相立可  
然哉果シテ  
然ラハ戶籍  
面養女ノ書  
式如何相認  
可然哉  
指念卅五年二  
第二條 實  
子ノ次ハ養  
子トノ記  
載可致事

- 一 米麥秣藁鹽味噌醬油漬物梅干及ヒ薪炭
  - 二 乘馬駄馬駕馬車輛其他運搬ニ供スル獸類及ヒ器具
  - 三 人夫
  - 四 宿舍厩圍及ヒ倉庫
  - 五 飲水石炭
  - 六 船舶
  - 七 鐵道瀛車
  - 八 演習ニ要スル地所
  - 九 演習ニ要スル材料器具
- 第十三條 戰時若クハ事變ニ際シテハ第十二條ノ諸項ニ掲クルモノ、外徵發ス可キモノ左ノ如シ但平時ノ演習及ヒ行軍ニハ徵發スルコトヲ得ス
- 一 造船所工作所及ヒ軍事ノ工作ニ要スル材料器具
  - 二 職工礦夫洗濯人ノ類

第三條 第

二條ノ通

○

天北條縣八

九月三日

第一項 士

族ノ者家祿

奉還農工商

ノ業ニ着手

シ終ニ意見

ヲ誤リ家産

ヲ失ヒ多少

ノ負債ニ相

成候者死去

致候處家族

ノ一家繼承

三 被服裝具艸鞋兵器彈藥船具寢具藥劑治療器械及ヒ細帶具

四 水車搗春ノ類

五 病院

第十四條 第十二條第二項中徵發ノ免除ヲ受ク可キモノ左ノ如シ

一 皇族所用ノ車馬

二 外國公使館並ニ領事館ニ屬スル車馬

三 乘馬本分タル職務ニ要スル馬匹

四 郵便用ノ車馬

五 公認セラレタル種牛種馬

第十五條 第十二條第四項中徵發ノ免除ヲ受ク可キモノ左ノ如シ



可致者無之  
且親戚其外  
ヨリモ破産  
後負債ヲ引  
受候テハ永  
續ノ目途無  
之趣ヲ以テ  
養子難相調  
節ハ一家斷  
絶ニ及ヒ候  
正無餘儀次  
第二付其儘  
差置可然哉  
第二項 前  
條ニ付一旦  
斷滅ニ及ヒ

- 一 公務ニ属スル麻署
  - 二 皇族ノ邸宅
  - 三 外國公使館領事館及ヒ其所屬館
  - 四 鐵道電信郵便使用ノ建造物
  - 五 陸海軍將校並ニ同等官現住ノ家屋
  - 六 博物館書籍館
  - 七 病院盲啞院棄兒院
  - 八 學校但臨戰合圍地境内ニ在リテハ此限ニ在ラス
  - 九 製造場内機械室
- 第十六條 第十二條第二項ニ掲クルモノ、使用ハ其原  
用ヲ轉シテ他用ニ供スルヲ許サス但戰時若クハ事變  
ニ際シテハ此限ニ在ラス

候處經年ノ  
後親戚或ハ  
同族平民等  
ノ内子弟ヲ  
以テ家名相  
續爲致度願  
出候節ハ聞  
届士族ニ編  
入不苦候哉  
指金 八年十  
二月七日  
日 書面初  
項同籍中相  
續スヘキ者  
無之親戚ニ  
於テハ其負  
債辨償ノ目

- 第十七條 第十二條第二項ニ掲クルモノハ其差出場所  
ヨリ六里未滿ノ地ニ於テ使用スルヲ例トシ一日ノ使  
用ハ六里ニ越ユルコトヲ得ス但戰時若クハ事變ニ際  
シテハ六里以外ノ地ニ使用スルコトヲ得
- 第十八條 第十二條第四項ニ掲クルモノハ合圍地境内  
ヲ除クノ外居住者ノ起卧及ヒ營業ニ必要ナル場所ヲ  
徵用スルコトヲ得ス但營業ニ必要ナルモ旅店等ハ此  
限ニ在ラス
- 第十九條 宿舍ノ廣狹ハ其地家屋ノ數ト隊伍ノ編制ト  
ニ從ヒ一定シ難シ故ニ臨時適宜ニ之ヲ定ム
- 第二十條 第十二條第四項ニ掲クルモノハ陸軍若クハ  
海軍ノ都合ニ依リ特ニ其場所ヲ指定スルコトアル可

途ナキヲ以

テ相續不申

立時ハ家名

ハ其儘斷絶

無論タルハ

ク其家財産

ノ儀ハ先ツ葬

式入費ヲ葬

主ハ給シタ

ル餘分ハ負

償償辨ノ為

ノ悉皆債主

ハ相渡可申

事

次項一旦斷

滅スルノ家

シ

第二十一條 宿舍ヲ定メタルノ後ハ區町村ノ便宜ヲ以

テ他ニ轉移セシムルコトヲ許サス厩圍倉庫亦同シ

第二十二條 宿舍厩圍ノ徵發ヲ課セラレタルモノハ併

セテ人馬ノ食飼ヲ供給ス可シ但駐軍三日以上ニ至ル

トキハ第四日ヨリ食飼ハ陸軍若クハ海軍ノ自辨トス

第二十三條 第十二條第六項ノ徵發ニ係リ其乘載人馬

ノ食飼ヲ要スルモノハ併セテ供給セシム

第二十四條 第十二條第六項及ヒ第七項ニ掲クルモノ

ハ戰時若クハ事變ニ際シ借切トシテ之ヲ徵用スルコ

トアル可シ

第二十五條 第十二條第二項第六項及ヒ第七項ニ掲ク

士族編入ノ

儀ハ不相成

事

○

芝宮城縣八

三月十二

日伺

當縣士族佐

藤傳三郎死

去家族無之

親戚中ニモ

養子可致男

子無之依テ

實家ノ姉小

野菊次長女

ヲ相續人ニ

相立度旨親

ルモノヲ其操業者ヲ併セテ徵用スルヲ例トス但時宜

ニ依リ各個ニ分別シテ徵用スルコトヲ得

第二十六條 第十二條第六項ニ掲クルモノヲ操業者ト

各個ニ分別シテ徵用スルハ戰時若クハ事變ノ際ニ限

ル但船橋及ヒ舢舨ニ充ツルモノハ此限ニ在ラス

第二十七條 第十二條第七項ニ屬スル瀛車其屬具鐵道

建築所用ノ材料器具及ヒ操業者ヲ各個ニ分別シテ徵

用スルハ戰時若クハ事變ノ際ニ限ル

第二十八條 第十三條第五項ニ掲クルモノハ陸海軍病

院ノ補助トシテ徵用スルヲ例トス但合圍地境内ニ在リ

テハ全ク明渡サシムルコトヲ得

第二十九條 徵發ニ係ルモノハ第三十一條乃至第五十

類ヨリ願出

條ニ定ムル所ノ方法ニ從ヒ賠償ス

候處明治六

第三十條 徵發物件ヲ差出場所ニ輸送スルハ徵發區ノ

年第二十八

義務トシ其輸送貨ヲ支辨セス

号御布告ニ

第三十一條 賠償ハ平時ト戰時トヲ論セス其時々之ヲ

ヨリ勘考候

支辨スルモノトス但戰時若クハ事變ニ際シ紛擾ノ爲

ヘハ戸主ハ

メ延滞シテ三ヶ月ヲ越ユルトキ八年六分ノ割ヲ以テ

男子タルハ

其利子ヲ付ス

キ儀ニ相見

第三十二條 賠償ハ徵發區毎ニ一括シテ府知事縣令郡

ヘ他家ヨリ

區長戸長停車場長船舶會社ノ店長ヨリ之ヲ請求ス可

養子致シ候

シ

モ男子ヲ撰

第三十三條 徵發物件ノ其使用ノ爲メニ毀損シタルモ

ミ相當ニ可

ノハ賠償ス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキ

有之ヤ又ハ

死者ノ遺言

等モ無之上

ハ賠償ス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキ

ハタトヒ女

ハ賠償ス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキ

子ニ候トモ

ハ評價委員ノ評定ニ任ス

本人血筋有

其毀損ハ持主若クハ操業者ヨリ速ニ其地ニ在ル陸海軍官

之者ヲ相續

憲若クハ區戸長ニ届出可シ其届出ハ徵用濟引渡ノ後

人ニ相立相

左ノ期限ヲ越ユ可カラズ若シ其期限ヲ越ヘ又ハ期限

當ニ可有之

中持主若クハ操業者ニ於テ使用セシトキハ無効トス

ヤ相伺候也

一 西洋形船舶 七日間

指金八年

二 地所 評價委員ノ告示スル時日間

承スヘキ相

三 其他ノ物件 一日間

應ノ男子無

第三十四條 第十二條第一項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ

之節婦女子

其地市場ノ前三ヶ年間ノ平均價ヲ取り之ヲ定ム其平

ニ相讓リ候

均價ノ取り難キモ、ハ評價委員ノ評定ニ任ス

戲ハ戸主ノ

第三十五條 第十二條第二項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ

母妻女子女

ニテ生レシ

孫又ハ其家

ニテ生レシ

伯叔母姉妹等ニ限リ候儀ト可相心得事

憲官縣下月廿八日

士族亡戸主實子ナク死亡後ノ養女ヲ以テ追テ相應ノ養子致シ候迄家督相續願出候處曾テ養女家督ノ儀同ト客年九月十八日付

其郡區平常ノ賃價トス但物件ト操業者トヲ各個ニ分別シテ徵用シタルトキハ其郡區平常ノ雇賃及ヒ借賃ニ准シテ賠償ス

第三十六條 第十二條第二項ノ徵發ニ係ルモノヲ宿泊セシメ連日使用スルトキ及ヒ六里以外ノ地ニ於テ使用スルトキハ第三十二條ノ例ニ拘ハラズ賃價ノ半額ヲ前給シ宿泊食飼ヲ官給ス但此場合ニ於テハ賃價ノ四分ノ一ヲ減ス

第三十七條 第十二條第二項及ヒ第六項ニ掲クルモノヲ買上クルトキハ勿論其他使用ノ都合ニ依リ價格ノ豫定ヲ要スルトキハ其金額ヲ定メ置ク可シ其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス

月十八日付 第八千三百号ヲ以テ其家ニテ生レシ男女子他家へ縁付候テ舉ケタル女子并生前養置候女子ヲ以テ相續ノ儀親族協議ノ上願出候ハ、聽旨不當旨御指公有之候ニ付テハ生前

第三十八條 第十二條第三項ノ徵發ニ係ルモノハ第三十五條ニ准シテ賠償シ第三十六條ヲ適用ス

第三十九條 第十二條第四項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ陸海軍省ニ於テ之ヲ定ム

第四十條 第十二條第五項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其地平常ノ代價トス

第四十一條 第十二條第六項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ別ニ命令書アルモノ、外左ノ區別ニ從フ

一 出船ノ定時アリテ定路ヲ航スルモノハ平常ノ定賃

二 定路ヲ航スルモ特ニ出船時日ヲ命シタルトキハ

養置候女子

ニ無之ト雖

氏共女子申

家ヨリシ家

ハ嫁シタル

女子ノ孫女

ニ相當リ甲

家亡戸主ト

ハ從弟女ノ

續ニテ他ニ

血統ノ者モ

無之親族協

議願出候ハ

聽届不告

哉相伺候也

指合二十年十

三月十

其乘載量五分ノ三ニ滿チタル以上ハ前項ノ例ニ  
准ス若シ之ニ滿タサルモ五分ノ三ニ值ル平常ノ  
定賃

三 出船及ヒ航路ノ定メナクシテ定賃ナキモノ又ハ  
運送ヲ以テ營業トセサルモノ等其賠償金額ニ就

キ供給者ト熟議調和ヤサルトキハ評價委員ノ評  
定額

第四十二條 第二十四條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操  
業者平常ノ給料航泊實費及ヒ船舶ノ損料トス其損料

ハ一ヶ月ニ各船舶買入代價六十四分ノ一トス

第四十三條 第二十六條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操  
業者ニハ平常ノ給料船舶ニハ第四十二條ノ損料トス

一 書面伺  
趣聞届不  
告候事

八高知縣八  
七月廿三  
日同

華士族破廉  
耻甚ヲ犯シ

除族セラ  
ル後他ノ華  
士族養子ト

ナリ其家ヲ  
相續スルヲ

聽ス但處刑  
後海過ノ實

跡相立ト雖

但船橋及ヒ舢舨ニ充テタルモノ、賠償金額ハ第四十  
一條第三項ニ準ス

第四十四條 第十二條第七項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ  
別ニ命令書アルモノ、外平常ノ定賃トス

第四十五條 第二十七條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操  
業者ニハ平常ノ給料物件ニハ其地平常ノ代價若クハ

損料トス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキ  
ハ評價委員ノ評定ニ任ス

第四十六條 第十二條第八項ノ徵發ニ係ルモノハ其植  
物ニ損害ヲ加ヘ又ハ地形ヲ變更シタルトキニ限り賠

償ス其金額ハ評價委員ノ評定ニ任ス

第四十七條 第十二條第九項ノ徵發ニ係ルモノハ其地

氏復族ヲ聽  
 十、ル儀ハ  
 勿論ニ候得  
 共右除族セ  
 ラレ候家ニ  
 於テハ男子  
 有之襲族致  
 ス處追テ死  
 失シ外ニ男  
 女子并親戚  
 ノ中ニモ相  
 當相續候者  
 無之忽テ血  
 統ニ可斷絶  
 情願ニヨリ  
 除族ノ者ハ

平常ノ代價若クハ相當ノ損料ヲ賠償ス

第四十八條 第十三條第一項第三項及ヒ第四項ノ徵發  
 ニ係ルモノハ其地平常ノ代價若クハ損料ヲ賠償ス其  
 金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員  
 ノ評定ニ任ス

第四十九條 第十三條第二項ノ徵發ニ係ルモノハ第三  
 十五條ニ準シテ賠償シ第三十六條ヲ適用ス

第五十條 第十三條第五項ノ徵發ニ係ルモノハ通常患  
 者ノ例ニ從フテ賠償ス全ク明渡サシムルトキハ第三  
 十九條ノ例ニ準ス

第五十一條 徵發ヲ拒ミ或ハ規避シ或ハ漫リニ使役ヲ  
 離レタルモノ及ヒ之ヲ教唆誘導シタルモノハ一月以

相續爲致度  
 親戚ノ者ヨ  
 ソ願出候時  
 ハ復族ニ相  
 成候姿ニ候  
 得共聞届不  
 苦哉

指令ハ年十  
 日五

同之通  
 佐賀縣七年  
 何月四日

第一條 除  
 族ノ刑ヲ蒙  
 ル者華士族  
 ハ養子ニ行

上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰  
 金ヲ附加ス

第五十二條 徵發ノ命令ヲ受ケタル府知事縣令郡區長  
 戶長停車場長船舶會社ノ店長其處置ノ爲サ、ルモノ  
 ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ貳拾圓以上百圓  
 以下ノ罰金ヲ附加ス其懈怠ニ出ルモノハ貳拾圓以上  
 百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十三條 徵發書ヲ出スノ權ヲ有スル官憲妄ニ徵發  
 書ヲ出シ又ハ其權ヲ有セサル官憲徵發書ヲ出シタル  
 トキハ一年以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ糾官  
 ヲ附加ス

○第七編

行政官吏服務紀律ノ事

キ其家ヲ襲  
キ其族ヲ冒  
ス平民華  
士族ノ家ヲ

行政官吏服務紀律左ノ通相定候條此旨相達候事  
行政官吏服務紀律

相續致候者  
ト一般ニ見  
做シ可然哉

第一條 凡ソ官吏ハ法律及職制章程ニ從ヒ各其職ヲ盡  
スヘシ

第二條 除  
族ノ刑ヲ受  
ル子弟ヲシ  
テ其家ヲ相  
續爲致候儀

第二條 凡ソ官吏ハ太政大臣又ハ本屬長官ヨリ下ス所  
ノ達示ヲ遵守スヘシ

モ前條ノ通  
心得可然哉  
但養子ト稱  
ス可キ試

第三條 所屬官ハ事ヲ本屬長官ニ受ケ其命ニ順ヒ職務  
ヲ執行スヘシ

第四條 凡ソ官吏ハ職務ノ内外ヲ論セス廉耻ヲ勵マス  
コトヲ務ムヘシ

第四條 凡ソ官吏ハ職務ノ内外ヲ論セス廉耻ヲ勵マス  
コトヲ務ムヘシ

第五條 官吏官ノ機密ヲ漏洩スルコトヲ得ス其職ヲ退

第五條 官吏官ノ機密ヲ漏洩スルコトヲ得ス其職ヲ退

第三條 戶  
主除族ノ刑  
ヲ蒙リ繼嗣  
ノ子弟ナキ  
歟又ハ無據  
事故有之右  
除族ノ者ヲ  
以テ其家ヲ  
相續爲致候  
儀モ不告哉  
指令八年十  
月二十五  
日十五

クノ後ニ於テモ亦同様ナルベシ

第六條 官吏本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト  
間接トヲ論セス本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行  
フコトヲ得ス

第六條 官吏本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト  
間接トヲ論セス本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行  
フコトヲ得ス

第七條 官吏本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其職務  
ニ関シ他人ノ贈遺ヲ受ルコトヲ得ス

第七條 官吏本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其職務  
ニ関シ他人ノ贈遺ヲ受ルコトヲ得ス

第八條 官吏他人ノ請托ヲ受ケ私ニ拘ヒ公ヲ亂ルコト  
ヲ得ス

第八條 官吏他人ノ請托ヲ受ケ私ニ拘ヒ公ヲ亂ルコト  
ヲ得ス

第九條 官吏本屬長官ノ許可ナクシテ擅ニ職役ヲ離ル  
ハコトヲ得ス及事ニ托シ疾ヲ引キ職事ヲ曠廢スルコ  
トヲ得ス

第九條 官吏本屬長官ノ許可ナクシテ擅ニ職役ヲ離ル  
ハコトヲ得ス及事ニ托シ疾ヲ引キ職事ヲ曠廢スルコ  
トヲ得ス

第十條 官吏前ノ各條ニ違ヒ頭狀アル者ハ本屬長官其

第十條 官吏前ノ各條ニ違ヒ頭狀アル者ハ本屬長官其

同之通  
第二條  
同之通  
書面第一條

同之通  
第二條  
同之通  
書面第一條

但養子ト稱  
セズ本休續  
柄名稱ノ儘  
タル可シ

第三條 除

族ノ戸主何  
様ノ事情有  
之共直ニ相  
續難相成候

事

但其家族或

ハ親族一旦

相續セシ後

其續合ニ從

ヒ養子或ハ

相續入トス

輕重ニ從ヒ旨ヲ諭シ職ヲ辞セシメ又ハ懲戒例ニ依リ

處分スヘシ其功過相補フヲ以テ處分ヲ宥恕スヘシト

認ムル者ハ本屬長官其情狀ヲ具シ太政大臣ニ上申シ

テ量定ヲ請フヘシ

第十一條 長官ハ各其所屬官ヲ檢察マルノ務ニ任ズヘ

シ

第十二條 臨時巡察使ヲ派出シテ官吏ノ治績及功過ヲ

檢察シ狀ヲ具シテ直チニ太政大臣ニ上申セシムヘシ

明治十五年七月廿七日第四十五号

本年第四十四号達行政官吏服務紀律ハ司法官吏ニ通用

スヘシ但第三條ノ判事ニ於ケルハ此限ニアラス

判事檢察ハ職務ニ関シ他人ノ贈遺ヲ受クルヲ得ス故ニ

ルハ差許不

苦候事

高知縣

同

茲ニ長男二

男及ヒ長女

アリ長男尊

テ罪アリ除

族セラハ然

ト雖其性

敏捷一家整

理ノ上ニ於

テ舉族之ニ

信依スニ男

及長女ハ之

ニ及シ父母

第七條ハ通用ノ限ニアラス

右相達候事

一 郡區長郡書記席次ノ事

郡區長郡書記席次左ノ通相定候條此旨相達候事

一 郡區長東京府區長ヲ除クハ府縣一等屬典獄ノ上席トス

一 郡區書記ハ月俸ノ多寡ヲ拘ハラズ其官等ニ依リ府縣

同等官ノ下席トシ其官等相當ノ俸給ヲ受クル無等判

任官ノ上席トス

一 戶長撰任ノ事

戶長ハ其町村人民ニ於テ可成公撰セシメ必ス府知事縣

令ヨリ辭令書相渡スヘシ此旨相達候事

但辭令書授附ノ式及ヒ公撰方法等ハ地方適宜ニ定ム



ヘキ事

(三) 参事院職制ノ事

ラス思慮自ラ之ク前途 家政ヲ整理 スル覺束ナク已ムヲ得 ス除族ノ長 男復籍嗣子 ニ相立度願 出ツル者ア ル時ハ明治 六年二月十 五日司法省 伺御指今相 續ノ爲ノ除

参事院職制

議長 一人 相當 一等

副議長 一人 同 同

議官 無定員 同 一等ヨリ三 等ニ至ル

議官補 無定員 同 四等ヨリ七 等ニ至ル

員外議官補 無定員

各省書記官ノ中ヲ以テ兼テ之ニ充ツ相當本官ニ依

書記官 無定員

議官補ノ中ヲ以テ兼テ之ニ充ツ相當本官ニ依ル 書記生 無定員 相當 八等ヨリ十 七等ニ至ル

参事院章程

第一條 参事院ハ太政官ニ属シ内閣ノ命ニ依リ法律規 則ノ草定審査ニ参預スルノ所トス

第二條 参事院ノ職員ハ議長一人副議長一人議官及議 官補員外議官補トス

第三條 議官ノ中議長ノ命ヲ以テ部長六人ヲ置キ各部 ノ事務ヲ提理ス

第四條 議官補ハ各部ニ分属シ議案ヲ造リ及會議ニ列 シ本案ノ趣旨ヲ辨明ス

族ノ實子ヲ 復籍セシム ルニモ養子 ニ準シ候事 ト有コレニ 照據シ聞届 不苦哉相伺 候也

指念十月十七 日 書面ノ 趣長男除族 ノ上ハ相續 權次男ハ相 移リ候儀ニ 付廢嫡ハ難 相成候筋ニ

候得共事實 無餘儀次第

ニ候ハ一本 入願書相添 更ニ可申出 事

第六條 書記官ハ議官補ノ中ヲ以テ之ニ充テ議長内局ノ事ヲ幹ス

第七條 參事院ノ事務左ノ如シ

第一 本院ノ發議ヲ以テシ又ハ内閣ノ命ニ因リ法律規則案ヲ起草シ理由ヲ具ヘテ内閣ニ上申ス

第二 各省ヨリ上稟スル所ノ法律規則案ヲ審案シ意見ヲ具ヘ或ハ修正ヲ加ヘ内閣ニ上申ス

第三 元老院ニ於テ議決スル所ノ法案ヲ審查シ時宜ニ依リ意見書ヲ具ヘテ内閣ノ命ヲ請ヒ元老院ノ再議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

第五條 員外議官補ハ諸省書記官ノ中ヲ以テ兼テ之ニ充ツ本職主任ノ件ニ限リ臨時議事ニ列席ス

第六條 書記官ハ議官補ノ中ヲ以テ之ニ充テ議長内局ノ事ヲ幹ス

第七條 參事院ノ事務左ノ如シ

第一 本院ノ發議ヲ以テシ又ハ内閣ノ命ニ因リ法律規則案ヲ起草シ理由ヲ具ヘテ内閣ニ上申ス

第二 各省ヨリ上稟スル所ノ法律規則案ヲ審案シ意見ヲ具ヘ或ハ修正ヲ加ヘ内閣ニ上申ス

第三 元老院ニ於テ議決スル所ノ法案ヲ審查シ時宜ニ依リ意見書ヲ具ヘテ内閣ノ命ヲ請ヒ元老院ノ再議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

議ヲ求マルコトヲ得或ハ内閣ノ命ニ依リ本院ノ委

同居ヲ聽

シ來候處同

前附籍ヲ願

フ者モ實ニ

無生産ノ分

ハ追テ獨立

活計ノ道相

立候追附籍

厄介ヲ聽シ

不苦筋ニ候

哉尤身分取

扱方ハ元身

分平ヲ以テ

シ可然事ト

存候此般相

伺候也

本邦

本邦

本邦

本邦

本邦

本邦

本邦

本邦

本邦

本邦

本邦

本邦

第十條 議官ハ内閣ノ命ニ因リ内閣委員トナリテ元老

院ニ出頭シ議案ヲ辨明スルコトアルヘシ

第十一條 本院中左ノ事務ヲ分掌スル為メニ内局及六部

ヲ置ク

内 局 院中ノ庶務及圖書ノ事

外務部 外交ノ事

内務部 内治勸業工業教育ノ事

軍事部 陸海軍ノ事

財務部 歳出歳入及國債貨幣租稅ノ事

司法部 恩赦特典及裁判ノ章程權限並行政裁判ノ事

法制部 民法訴訟法商法刑法治罪法ノ事

第十二條 本院ノ議事ハ分テ部會議總會議ノ二類トス

附籍ノ事由  
ヲ記載シ置  
クヘキ事

王秋田縣七  
十月二十  
八日伺ノ内

一 改定律例

第十四條凡

華士族罪ヲ

犯シ破廉耻

甚ニ係リ云

々其餘族ニ

該ル者ハ祿

ヲ收メ本犯

一人ヲ除シ

族ハ子孫ニ

襲カシムト

アリ然ルニ

戶主除族セ

ラレ其族ヲ

襲クヘキ子

孫ナク只一

人ノ母アリ

其族ヲ有ス

ルハ勿論ニ

候得共家跡

相續ノ筋ニ

部會議ハ一部ノ議官議官補會議シ若シ兩部以上關係

アル議案ニ就イテハ兩部以上ノ議官議官補聯合會議ス

ル者トス總會議ハ六部ノ議官議官補共同會議スル者トス

第十三條 法律及外國條約案ニ係リ又ハ第八條第二項

ノ件ニ係ル者ハ總會議ヲ用フヘシ其他議長ニ於テ重

要事件ト思惟スル者ハ總テ之ニ準スヘシ

第十四條 部會議ノ成案ニ就キ議長ニ於テ異見アルト

キハ更ニ總會議ニ付スヘシ

第十五條 總會議ニ於テ議長事故アリテ闕席スルトキ

ハ副議長上席スヘシ議長副議長共ニ事故アリテ闕席

スルトキハ議長ノ撰ヲ以テ假ニ上席人ヲ定ムヘシ

第十六條 部會議ニ於テ部長事故アリテ闕席スルトキ

モ無之即無  
戸主ノ姿ニ  
付其母ハ養  
子爲致可然  
哉  
一戸主除族  
斬罪ノ節養  
祖父母等既  
ニ死去獨リ  
妻ノミ現在  
シ其妻本族  
ノ血統ニ候  
共固ヨリ夫  
ノ身分ニ從  
ヒ平民トナ  
ルヘキモノ

ハ該部長ノ撰ヲ以テ假ニ上席人ヲ定ムヘシ  
第十七條 凡ソ會議ニ上席スル者ハ議事可否共ニ多數  
ヲ得サル時ニ當リ判決ノ權ヲ有ス

第十八條 内閣員ハ臨時ニ總會議又ハ部會議ニ臨席シ  
意見ヲ述フルコトヲ得

第十九條 議案ノ總會議ヲ經タルモノハ議長ノ名ヲ以テ内閣  
ニ上申スヘシ其總會議ニ付セサル者ハ部議ヲ經ルノ後内  
局ニ送り議長之ヲ審署シ其名ヲ以テ内閣ニ上申スヘシ

第二十條 凡ソ文案謄写スル者アレハ内局ニ於テハ書  
記官各部ニ於テハ部長各其責ニ任スヘシ

府縣官職制ノ事  
明治八年十一月 第二百三號達府縣職制並事務章程ヲ廢シ

ナレハ本族  
ハ斷絶ノ筋  
ニ有之候哉  
指令八年二  
月二十  
日五  
第一條 其  
母相續ニ相  
立候トモ又  
ハ其母ハ養  
子致候トモ  
不告候事  
第二條 其  
遺妻本族ヲ  
有シ相續ニ  
相立候トモ  
又ハ他ヨリ

府縣官職制別冊ノ通り被定候條此旨相達候事

府縣官職制

府知事 一人

縣令 一人

第一 府知事縣令ハ部内ノ行政事務ヲ總理シ法律及政  
府ノ命令ヲ執行スルヲ掌ル

第二 府知事縣令ハ内務卿ノ監督ニ屬スト雖モ各省主  
任ノ事務ニ就テハ各省卿ノ指揮ヲ受ク

第三 府知事縣令ハ法律及政府ノ命令ヲ執行スル爲ニ  
要用ナリトスル片ハ其實施ノ順序ヲ設ケテ部内ニ布  
達シ及其適宜處分ヲ許サレタル事件ニ就テハ規則ヲ  
設立シテ部内ニ布達スルヲ得而シテ發行ノ後直チ

本邦法律 卷一 第百三十三號

養子シテ襲  
族致候トモ  
不苦候事

但其妻夫死

後三百日ヲ

過キ候ハハ

後夫ヲ迎候

モ不苦尤遺

亂ノ徴ナリ

旨二人已上

ノ証人有之

者ハ不在此

限事

王和歌山縣

八年五月  
廿七日伺

ニ各省主務ノ卿ニ報告スヘシ

第四 府知事縣令ノ布達若クハ處分法律若クハ政府ノ  
命令ト相背キ又ハ權限ヲ侵シタルトキハ太政大臣若

クハ各省主務ノ卿ヨリ取消ヲ命セラル、フアルヘシ

第五 府知事縣令行政事務ニ就キ主務ノ卿ニ稟請シ指  
揮ヲ待テ處分スヘキ者ハ別ニ定ムル規則ニ從フヘシ

第六 府知事縣令ハ地方稅ヲ徵収シテ部内ノ支費ニ充  
ツルヲ得而シテ其豫算決算ヲ具ヘテ内務卿大藏卿ニ

報告スルヲ要ス其府縣會アル地方ハ之ヲ會議ニ付ス

第七 府知事縣令ハ屬官ヲ判任進退シ其分課ヲ命ス

第八 府知事縣令ハ郡長以下郡ノ吏員ヲ判任進退シ郡

務ヲ指揮監督ス

第九 府知事縣令ハ非常事變アレハ鎮臺若クハ分營ノ  
將校ニ通議シテ便宜處分スルヲ得

第十 府知事縣令ハ府縣會ヲ召集シ及ヒ其會議ヲ中止  
スルヲ得

第十一 府知事縣令ハ議案ヲ發シテ府縣會ニ付シ決議  
ノ後之ヲ認可シ或ハ認可セサルコトヲ得

大書記官 府ハ大小各々一員ヲ置キ縣ハ大  
少ノ内一人ヲ置ク開港所ノ縣事

小書記官 務繁劇ナルハ上請ニ依リ府ト同  
ク各々一員ヲ置クヲ許ス

第一 書記官ハ府知事縣令ヲ輔ケテ部内ノ行政事務ヲ  
參判スルコトヲ掌ル

第二 府知事縣令不在ノキ又ハ事故アルトキハ書記官

士族ノ戶主

除族相成父

母其他家族

無之該家相

續人ノ儀親

族協儀血統

ノ者願出候

ハ、士族ノ  
家名可被存  
ヤ又ハ其除  
族ニ相成候  
者單身ニ付  
該家士籍ノ  
稱斷滅セシ  
上ハ襲族可  
致筋ニ無之

候ヤ相伺候  
也  
ハ代理ノ任ヲ受ク

指令(八年十月十三日)

第一 警部長ハ事ヲ府知事縣令ニ承ケ其府縣警察上一切ノ事務ヲ調理ス

第二 警部長ハ國事警察ニ付テハ直チニ内務卿ノ命令ヲ奉シ又ハ直ニ其事情ヲ具狀スルコトアルヘシ

屬(一等ヨリ十等ニ至ル)

屬ハ事ヲ府知事縣令ニ受ケ庶務ヲ分掌ス

警部(一等ヨリ十等ニ至ル)

警部ハ事ヲ府知事縣令ニ受ケ管内ノ警察ヲ掌ル

郡長(八等相當) 一人

第一 郡長ノ俸給ハ地方税ヨリ支出ス一月八拾圓以下

○ 東京府 九年十二月廿七日 伺

當府士族丹

波國船井郡 第二區大村 住柳ヶ瀬松 之助ナル者 同郡第一區 青戸村小學 校ニ於テ竊 盜犯罪有之

二付同所出 張所ニ於テ 警部取訖ノ 節該犯其族 籍ヲ包藏シ 平民田中松 之助ト詐稱 スルニ泥ミ

各地方ノ便宜ニ從ヒ府知事縣令之ヲ定ム

第二 郡長ハ該府縣本籍ノ人ヲ以テ之ニ任ス

第三 郡長ハ事ヲ府知事縣令ニ受ケ法律命令ヲ郡内ニ 施行シ一郡ノ事務ヲ總理ス

第四 郡長ハ法律命令又ハ規則ニ依テ委任サルノ條件 及府知事縣令ヨリ特ニ分任ヲ受クル條件ニ付便宜處 分シテ後ニ府知事縣令ニ報告ス

第五 郡長ノ處分不當ナリトスル片ハ府知事縣令ヨリ 取消ヲ命セラル、トアルヘシ

第六 郡長ハ町村戸長ヲ監督ス

郡書記(十等ヨリ十七等ニ至ル) 定員アリ

郡書記ノ俸給ハ地方税ヨリ支出ス其額ハ府知事縣令

ニ定ム

本邦法令摘要 卷下 三

萬葉集

口供甘結同  
國園部區裁  
判所(求刑  
ノ未實決處  
分ノ後士族  
タルノ趣相  
分り候ニ付  
取調主務ノ  
者ヨリ進退  
相伺候間右  
貼斷ノ儀該  
裁判所へ及  
裁合候處司  
法省日誌本  
年第三十一  
号長崎裁判

ノ適宜ニ定ムル所ニ從フ其選任進退ハ郡長ノ具狀ニ依リ府知事縣令ノ命スル所タリ  
市街ノ地ニ置ク所ノ區長並書記ハ總テ郡長郡書記ト同シ府縣ノ事務主務ノ省ニ稟請シテ後ニ處分スヘキ者ハ左ノ件ヤトス  
第一 郡ヲ分チ及數郡ニ一郡長ヲ置キ及區ヲ定ムル事  
第二 郡區經界ノ組替及町村ノ飛地組替ノ事  
第三 官給ニ係ル經費ヲ豫算シテ一歲ノ常額ヲ定ムル事  
第四 例規ナキ官金出納ノ事  
第五 官金管守ノ規則及爲替又ハ預ケノ方法ヲ設クル事

所伺第一條

指令ニ照依

シ貼斷ニハ

及ハス哉ノ

旨回答有之

就テハ該犯

服役満期ノ

上ハ其本籍

ノ儘士族ニ

被差置候儀

ニテ除族ノ

限ニハ無之

候哉賢決處

分ヲ受ルノ

後チ除族ト

ナストキハ

第六 府縣官舎及監獄ヲ新ニ建築スル事

第七 水旱災ニ罹リシ者ノ租稅延納ヲ許ス事

第八 水火災ニ罹リ家屋蕩盡スル者租稅皆濟期限後二ケ月以外延期ノ事

第九 地種變換ノ事

第十 土地ノ變替ニ依リ地租ヲ減スル事

第十一 地價ヲ檢シテ租額ヲ定ムル事

但潰地荒地起返シ又ハ開墾地年明ニ至リ租額ヲ定ムルハ此限ニ在ラズ

第十二 河港道路堤防橋梁開墾等ノ類他管ニ關涉スル

モノ及定額外官費ノ支出ニ係ル土功ヲ起ス事

第十三 諸貸下金返納期限六ケ月以下ノ延期ヲ許可シ

一罪ニシテ  
 二罪ヲ科セ  
 ラル、ニ該  
 リ候得共廉  
 耻ヲ破リシ  
 モノ其儘士  
 族ニ成置候  
 モ不都合ニ  
 付一應相同  
 候也  
 指全月二十  
 五日  
 書面伺ノ趣  
 除族ノ申渡  
 無之上ハ士  
 族ニ差置可  
 又ハ之ヲ棄捐スル事  
 第十四 官林伐採ノ事  
 但治水修路ノ爲メ三等官林ノ竹木ヲ用フルハ此限ニ在ラス  
 第十五 官地宅地及其木石ヲ賣却スル事  
 第十六 酒類ノ税率ニ用フル價ヲ定ムル事  
 第十七 官用ノ爲メ土地ヲ買上ル事  
 第十八 社寺除税地ノ境域ヲ更正スル事  
 第十九 官林拂下ノ事  
 第二十 官民有禁伐林ノ事  
 第二十一 森林地及竹木官民有ノ區別ヲ定ムル事  
 第二十二 鑛山借區境界ノ事

申事  
 但管疑ノ廉  
 有之分ハ尚  
 ホ司法省へ  
 可申立事  
 〇  
 至茨城縣八  
 六月五日  
 伺  
 甲ノ管轄内  
 ニ原籍アル  
 者全戸又ハ  
 家族ノ内一  
 兩人乙ノ管  
 轄内ニ寄留  
 中逃走スル  
 者ハ甲ノ本  
 第三十三 府知事縣令ノ名ヲ以テ官金辯償トナルヘキ  
 第二十三 鑛山借區税猶豫并減免ノ事  
 第二十四 坑法違犯ノ者處分ノ事  
 第二十五 舊金銀貨及通貨損傷ノモノヲ交換スル事  
 第二十六 外國人内地旅行ノ事  
 第二十七 外國人居留地外住居ノ事  
 第二十八 居留地地所外國人へ競貸ノ事  
 第二十九 内外人結婚願ヲ許可スル事  
 第三十 學校補助金ヲ例規外支消スル事  
 第三十一 私立學校ヲ停止スル事  
 第三十二 府知事縣令ノ名ヲ以テ外國人ト條約ヲ結フ事  
 第三十三 府知事縣令ノ名ヲ以テ官金辯償トナルヘキ



管廳ニ通知

スヘキハ勿

論ナレトモ公

則ニ依リテ

其親戚隣保

ハ更ニ六ケ

月間尋方申

付候ハ甲管

廳ノ專任ニ

可有之ヤ又

ハ寄留地親

戚ノ有無ニ

關セズ乙管

廳ノ專任ニ

心得可然ヤ

各縣區々ノ

貸借ノ契約ヲナス事

第三十四 例規ナキ恩典ヲ施行スル事

第三十五 社寺創立再興復舊等員數増加ニ係ル願ヲ許

否スル事

第三十六 開墾地銀下十ヶ年荒地免稅五ヶ年ヨリ以上

ノ年季ヲ付與スル事

但繼續年季ヲ要スル時當初ヨリ通算シテ此年限ヲ

越ユルモノモ本文ニ準ス

一 布告布達指令ヲ以テ專任サレタル事件並ニ定期成例

アルノ事件ハ地方官各自ノ責任ヲ以テ處分シ上司ニ

稟請スルノ例ニ在ラス其例規ニ依リ難キ事情アリテ

特別ノ處分ヲ要スルモノ、限リ理由ヲ具シテ申請ス

ルヲ得

取扱ニ相聞

候間相伺候

也

指令八年八

日

書面伺ノ趣

寄留ノ縣々

ニテ尋方取

計其段本籍

ハ通達可致

儀ト可心得

事

○

孟大阪府八

年

六月二十

九日同

家出逃亡シ

一 諸會社設立願、諸鑛開採願、圖書板權願、賣藥願等ノ條例

規則ニ依リ地方官ヲ經由スル者ハ府縣掌管ノ事務各

省ニ稟請スルノ類ト同シカラサルヲ以テ知事令ハ事

實ヲ公証スル爲ニ奥書若クハ加印シテ主務ノ省ニ進

達スルモノトス

一 嗣後發行スル法律規則中ノ條件府縣長官ノ上司ニ稟

請シテ然ル後處分スヘキモノハ每件明文ヲ掲クヘシ

一事重大ニ属シ例規ナキモノ及非常ノ事件ヲ除クノ外

凡ソ地方ノ常務前條々ニ掲載セサル條件ハ地方長官

ノ便宜處分シテ後ニ報告スルヲ許ス

戶長職務概目

テ三十六ヶ月ヲ過去立歸ラサルモ其遺財所分方如何取計可申哉左ノ件々相同候也

一家主家出逃亡シテ其家族並親族ナキモノ

一同斷其家族ナクシテ其親族アルモノ

- 第一 布告布達ヲ町村内ニ示ス事
- 第二 地租及諸稅ヲ取纏メ上納スル事
- 第三 戶籍ノ事
- 第四 徵兵下調ノ事
- 第五 地所建物船舶賃入書入并ニ賣買ニ與書加印ノ事
- 第六 地券臺帳ノ事
- 第七 迷子捨兒及ヒ行旅病人變死人其他事變アルトキハ警察署ニ報知ノ事
- 第八 天災又ハ非常ノ難ニ遭ヒ目下窮迫ノ者ヲ具狀スル事
- 第九 孝子節婦其他篤行ノ者ヲ具狀スル事
- 第十 町村ノ幼童就學勸誘ノ事

一同斷其家族アルモノ

指令 八年十月三日

書面伺ノ趣ハ當分其府ニ於テ適宜處分致ス可ク候事

愛知縣 九年四月七日 伺

明治七年八月 月中石川縣 同華士族平民共脱走後 二年以上復

- 第十一 町村内ノ人民ノ印影簿ヲ整置スル事
- 第十二 諸帳簿保存管守ノ事
- 第十三 官費府縣費ニ係ル河港道路堤防橋梁其他修繕保存スヘキ物ニ就キ利害ヲ具狀スル事

右ノ外府知事縣令又ハ郡區長ヨリ命令スル所ノ事務ハ規則又ハ命令ニ依テ從事スヘキ事其他町村限リ道路橋梁用惡水ノ修繕掃除等凡ソ協議費ヲ以テ支辨スル事件ヲ幹理スルハ此ニ掲ケル所ノ限ニ在ラス地方ノ事務郡區長ニ於テ處分シテ後知事令ニ報告スルヲ得ルモノ左ノ件々トス

- 第一 徵稅並地方稅徵收及不納者處分ノ事
- 第二 徵兵取調ノ事

歸セサル者 第三 身代限財産取扱ノ事  
 云々ノ御指 第四 逃亡死亡絶家ノ財産處分ノ事  
 令ニ親族集 第五 官有地ノ倒木枯木ヲ賣却スル事  
 議戸長へ届 第六 電線道路田畑水利ニ障碍アル官有樹木ヲ伐採ス  
 ケノ上遺留 財産ヲ管守  
 財産ヲ管守  
 シ二年ヲ經  
 過スルニ於  
 テハ相續人  
 ヲ定メ不告  
 云々ト相見  
 得候ニ付テ  
 ハ平民戸主  
 逃亡シ其父  
 母妻子アル  
 者モ同前ニ

第七 河岸地借地検査ノ事  
 第八 職遊獵願威銃願ノ事  
 第九 印紙界紙賣捌願ノ事  
 第十 小學校學資金ノ事  
 右ノ外府知事縣令ヨリ特ニ委任スル條件  
 五 諸省事務章程通則ノ事  
 各省従前ノ事務章程ヲ廢シ今般諸省事務章程通則別紙

年ヲ經サル  
 時ハ右親類  
 ノ者ヲ以テ  
 相續爲致候  
 儀不相成筋  
 ニ可有之哉  
 果シテ然ラ  
 ハ所有ノ動  
 産不動産實  
 入ノ分假ニ  
 親族ノ名面  
 ニ書換等ノ  
 儀モ不相成  
 哉相伺候也  
 指金十年ニ  
 月六日  
 書面逃亡者

ノ通被定候條此旨相達候事  
 諸省事務章程通則

第一條 各省卿ハ各省ノ行政事務ヲ總理ス  
 第二條 各省卿ハ該省所部ノ官屬ヲ統率シ及ヒ監督シ  
 奏任官ノ進退ヲ具狀シ其ハ等官以下ハ之ヲ判任ス  
 第三條 各省卿ハ主管ノ事務ニ付法律規則ヲ制定シ又  
 ハ之ヲ廢止改正スルヲ要スルコトアルトキハ案ヲ具  
 ヘテ上奏シ裁ヲ請フヘシ

第四條 凡法律規則布達ノ其主管ノ事務ニ屬スルモノ  
 ハ各省卿之ニ副署シ其執行ノ責ニ任スヘシ若シ兩省  
 以上ニ関涉スルモノハ関涉ノ省卿均シク之ニ連署シ  
 其責ニ任スヘシ

二十四ヶ月  
ヲ過キサル  
内ハ士民ニ  
論ナク相續  
人相立候儀  
難相成允財  
産質入等ノ  
分モ相續人  
ノ外親族名  
面ニ書換不  
相成儀ト可  
心得事  
三重縣十年  
四月九日  
同  
爰ニ戸主逃  
亡シ二十六

第五條 各省卿ハ所部ノ官屬ニ指令又ハ訓條ヲ下付ス  
ルコトヲ得

第六條 各省卿ハ主管ノ事務ニ付地方官ヲ監督スヘシ  
若シ地方官ノ處分法律規則ヲ犯シ若クハ權限ヲ侵ス  
モノアレハ之ヲ取消スコトヲ得

第七條 各省卿ハ主管ノ事務ニ付毎年一月前年ノ功程  
ヲ具ヘ報告書ヲ奏上ス

第八條 府縣并所部官屬ノ報告各省卿處分ニ屬スルモ  
ノ其事体重大ナルハ仍ホ處分シテ後ニ奏上スヘシ

第九條 各省ノ事務臨時ニ定額豫算外ノ費用ヲ要スル  
トキハ上奏シテ裁ヲ請フヘシ

第十條 各省卿事故マルトキハ臨時命ヲ受ケテ他ノ省

ケ月ヲ經過  
復歸セス永  
尋ニナルモ  
ノアリ右跡  
相續人ノ儀  
ハ戸主逃亡  
ノ後二ヶ年  
ヲ過キ候際  
已ニ家督相  
續ヲ爲シ遺  
留財産ハ相  
續人ニ歸ス  
ルモノニ候  
處六ヶ月以  
上ノ月數ヲ  
經テ地券書

卿其代理ニ任スヘシ

第十一條 各省輔官ハ卿ノ職ヲ輔ケ卿ノ命ヲ以テ各省  
内部ノ事務ヲ代理スルコトヲ得

〔キ〕 布告布達公布式改定ノ事

本年十一月第九十四号ヲ以テ諸省事務章程通則相達候  
ニ付テハ法律規則ハ布告ヲ以テ發行シ従前諸省限リ布  
達セル條規ノ類ハ自今總テ太政官ヨリ布達ヲ以テ發行  
候條此旨相達候事

但太政官及諸省ヨリ一時公布スルニ止ルモノハ告示ヲ以  
テ發行シ諸省卿ヨリ府縣長官ヘ達ノ儀ハ従前ノ通り

○第八編  
刑法ノ事

換願出ルモ  
ノアリ此等  
ハ先戸主死  
亡セシモノ  
ニハ無之候  
得共逃亡後  
二ケ年以上  
ニ及ヒ復歸  
セサルヨリ  
相續人ヲ定  
メタル上ハ  
其財産ハ其  
相續者專有  
スルノ理ア  
ルニ因リ尋  
常生存者ノ

刑法別冊ノ通改定候條此旨布告候事  
刑法

第一編 總則

第一章 法例

第一條 凡法律ニ於テ罰ス可キ罪別テ三種ト爲ス

一重罪 二輕罪 三違警罪

第二條 法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト雖モ之ヲ罰スルコトヲ得ス

第三條 法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスコトヲ得ス  
若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス

第四條 此刑法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ス可キ

家督相續ヲ  
ナシタル談  
與トハ固ヨ  
リ差別有之  
ニ付相續ヲ  
ナヒシ日ヨ  
リ滿六ヶ月  
以内ニ地券  
書換ノ手續  
ヲ爲サ、ル  
モノハ明治  
八年第五百  
十三号第二  
條死亡者ト  
同シク處分  
可然ヤ相伺

者ニ適用スルコトヲ得ス

第五條 此刑法ニ正條ナクシテ他ノ法律規則ニ刑名アル者ハ各其法律規則ニ從フ

若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサル者ハ此刑法ノ總則ニ從フ

第二章 刑例

第一節 刑名

第六條 刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス

主刑ハ之ヲ宣告ス

附加刑ハ法律ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム

第七條 左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

候也

指合十年六月九日

書面伺一通

○ 五兵庫縣 九月四日

同 縣下神戸元

町通一丁目

安田ヲ甘清

國廣東新會

縣梁達卿ト

婚嫁ノ儀別

紙ノ通願出候ニ付取調候處故障ノ

一死刑

二無期徒刑

三有期徒刑

四無期流刑

五有期流刑

六重懲役

七輕懲役

八重禁獄

九輕禁獄

第八條 左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス

一重禁錮

二輕禁錮

三罰金

第九條 左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲ス

一拘留

二科料

第十條 左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス

一剝奪公權

二停止公權

三禁治産

四監視

五罰金

六沒收

第十一條 刑ヲ執行シ及ヒ犯人ヲ檢束スル方法細目ハ

別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第二節 主刑處分

儀無之候條

御許可可相

成哉願書相

添相伺候也

指合八年六月八日

書面安田房

清國人梁達

卿へ婚嫁ノ

儀聞届候條

右許婚證書

別紙書式ノ

通相認メ夫

婦へ一通ソ

授與可致

第十二條 死刑ハ絞首ス但規則ニ定ムル所ノ官吏臨檢

シ獄内ニ於テ之ヲ行フ

第十三條 死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行

フコト得ス

第十四條 大祀令節國祭ノ日ハ死刑ヲ行フコト禁ス

第十五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懐胎ナル時ハ其

執行ヲ停メ分娩後一百日ヲ徑ルニ非サレハ刑ヲ行ハ

ス

第十六條 死刑ノ遺骸ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下

付ス但式ヲ用ヒテ葬ルコトヲ許サス

第十七條 徒刑ハ無期有期ヲ分タス島地ニ發遣シ定役

雛形

ニ服ス

有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第十八條 徒刑ノ婦女ハ島地ニ發遣セス内地ノ懲役場ニ於テ定役ニ服ス

第十九條 徒刑ノ囚六十歳ニ滿ル者ハ通常ノ定役ヲ免シ其體力相當ノ定役ニ服ス

第二十條 流刑ハ無期有期ヲ分タス島地ノ獄ニ幽閉シ定役ニ服セス

有期流刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第二十一條 無期流刑ノ囚五年ヲ經過スレハ行政ノ處分ヲ以テ幽閉ヲ免シ島地ニ於テ地ヲ限り居住セシムルヲ得

許婚證書用紙

奉書ノ類ヲ用ヘシ

明治年

月於日本兵

庫縣管下扱

津神戸結婚

清國廣東省

新會縣人日

本兵庫縣神

戶居留地ニ

香米國人館

内居住

夫 某族 梁達卿

其年某月 某日生

日本兵庫縣

管下第幾大

區幾小區攝

津國某郡神

戶元町幾番

地居住

戸主アレハ某姓名

女或ハ姑姉妹ト書スハ

婦 某族 安田房

其年某月 某日生

住所ヲ書ス

ル前ニ準ス

有期流刑ノ囚三年ヲ經過スル者亦同シ

第二十二條 懲役ハ内地ノ懲役場ニ入レ定役ニ服ス但六十歳ニ滿ル者ハ第十九條ノ例ニ從フ

重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十三條 禁獄ハ内地ノ獄ニ入レ定役ニ服セス重禁獄ハ九年以上十一年以下輕禁獄ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十四條 禁錮ハ禁錮場ニ留置シ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁錮ハ定役ニ服セス

禁錮ハ重輕ヲ分タス十一日以上五年以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

本邦法令局 卷下 五二 萬葉問 載

媒約人

某姓名

右結婚ノ後

妻安田房夫

梁達卿ニ從

ヒ清國戶籍

ニ入り以テ

其國法ヲ奉

スヘシ因テ

我國戶籍ヲ

除キ我國民

ナル分限ヲ

得サル者ト

ス故ニ其財

産ノ如キ動

産違則ナキ

第二十五條 定役ニ服スル囚人ノ工錢ハ監獄ノ規則ニ

從ヒ其幾分ヲ獄舎ノ費用ニ供シ其幾分ヲ囚人ニ給與

ス但現役百日以内ハ給與ノ限ニ在ラス

第二十六條 罰金ハ二圓以上ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ

其多寡ヲ區別ス

第二十七條 罰金ハ裁判確定ノ日ヨリ一月内ニ納完セ

シム若シ限内納完セサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シ之

ヲ輕禁錮ニ換フ其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ

計算ス

罰金ヲ禁錮ニ換フル者ハ更ニ裁判ヲ用ヒス檢察官ノ

求ニ因リ裁判官之ヲ命ス但禁錮ノ期限ハ二年ニ過ク

ルヲ得ス

者ヲ携持ス

ルヲ得ル

雖モ不動産

ヲ持有スル

ヲ許サス仍

テ其額ヲ准

シ許婚證ヲ

與フル者也

明治 年

月 日

兵庫縣令神

田孝平印

安田房女願

書

安田フサ

私儀今般清

若シ禁錮限内罰金ヲ納メタル時ハ其經過シタル日數

ヲ扣除シテ禁錮ヲ免ス親屬其他ノ者代テ罰金ヲ納メ

タル時亦同シ

第二十八條 拘留ハ拘留所ニ留置シ定役ニ服セス其刑

期ハ一日以上十日以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長

短ヲ區別ス

第二十九條 科料ハ五錢以上一圓九十五錢以下ト爲シ

仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第三十條 科料ハ裁判確定ノ日ヨリ十日内ニ納完セシ

ム若シ限内納完セサル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ之

ヲ拘留ニ換フ

第三節 附加刑處分



國廣東新會  
縣梁達卿ハ  
嫁付致度奉  
存候何卒御  
聞濟ノ上ハ  
御免許御鑑  
札御下渡シ  
被下度奉願  
上候也  
梁達卿  
申稟  
具呈清國廣  
東省新會縣  
人居住 貴  
縣神戶居留  
地第二番米

第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス  
 一 國民ノ特權  
 二 官吏ト爲ル權  
 三 勲章年金位記貴號恩給ヲ有スルノ權  
 四 外國ノ勲章ヲ佩用スルノ權  
 五 兵籍ニ入ルノ權  
 六 裁判所ニ於テ證人ト爲ルノ權但單ニ事實ヲ陳述ス  
 ルハ此限ニ在ラス  
 七 後見人ト爲ルノ權但親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲メ  
 ニスルハ此限ニ在ラス  
 八 分散者ノ管財人ト爲リ又ハ會社及ヒ共有財産ヲ管  
 理スルノ權  
 九 學校長及ヒ教師學監ト爲ル權

國人館内領  
貴縣上等  
指牌梁達卿  
今欲娶 貴  
縣人神戶松  
屋町四百四  
十六番内第  
三番家屋ノ  
女本年十八  
歲名房者爲  
妻事効惟ハ  
道已及壯年  
在外經營則  
内不可無人  
娶妻求後乃  
修身家之

第三十二條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ  
 用ヒス終身公權ヲ剝奪ス  
 第三十三條 禁錮ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒ  
 ス現任ノ官職ヲ失ヒ及ヒ其刑期間公權ヲ行フヲ停止  
 ス  
 第三十四條 輕罪ノ刑ニ於テ監視ニ付シタル者ハ別ニ  
 宣告ヲ用ヒス監視ノ期間公權ヲ行フヲ停止ス  
 主刑ヲ免シテ止テ監視ニ付シタル者亦同シ  
 第三十五條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ  
 用ヒス其主刑ノ終ルマテ自ラ財産ヲ治ムルヲ禁ス  
 第三十六條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル時ハ行政ノ  
 處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルヲ得

現行法律公報

常即此請同  
勅尊老詳行  
酌儀敬頌  
貴國與萬國  
許親之大儀  
今兩相情願  
欲為配合如  
蒙 俯准感  
戴何窮此女  
原籍係滋賀  
縣大津上東  
第八町二十  
二番人安田  
吉兵衛之所  
生會與此安  
田翁及安田

第三十七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ  
用ヒス各本刑ノ短期三分ノ一ニ等シキ時間監視ニ付  
ス

第三十八條 輕罪ノ刑ニ附加スル監視ハ之ヲ宣告ス但  
各本條ニ記載スルノ外監視ニ付スルヲ得ス

第三十九條 死刑及ヒ無期刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ  
別ニ宣告ヲ用ヒス五年間監視ニ付ス

第四十條 監視ノ期限ハ主刑ノ終リタル日ヨリ起算ス  
主刑ノ期滿免除ヲ得タル時ハ其捕ニ就キタル日ヨリ  
起算ス

若シ主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル時ハ其裁判確  
定ノ日ヨリ起算ス

翁之妻即房  
女ノ親母在  
此地當面講  
明欲娶嫁之  
事俱已承諾  
有字相照並  
非虛詭之舉  
妾以得為妻  
室終無反悔  
至於婚姻之  
後互守才良  
貞潔必重琴  
瑟和諧為此  
懇稟即將所  
由仰望 准  
令是感終身

第四十一條 監視ニ付セラレタル者其情狀ニ因リ行政  
處分ヲ以テ假ニ監視スルヲ得

第四十二條 附加ノ罰金ハ之ヲ宣告ス若シ一月内ニ納  
完セサル時ハ第二十七條ノ例ニ照シ輕禁錮ニ換ヘ主  
刑滿限ノ後之ヲ執行ス

第四十三條 左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ沒收  
ス但法律規則ニ於テ別ニ沒收ノ例ヲ定メタル者ハ各  
其法律規則ニ從フ

- 一 法律ニ於テ禁制シタル物件
- 二 犯罪ノ用ニ供シタル物件
- 三 犯罪ニ因テ得タル物件

第四十四條 法律ニ於テ禁制シタル物件ハ何人ノ所有

領德何日相  
休即此具單  
上  
京  
兵庫縣憲令  
神田孝平大  
老爺 代理  
兵庫縣推參  
事高橋信美  
大老爺 臺  
下  
明治七年第  
八月廿五日  
居留神戸  
梁達卿  
今據梁達卿

第四節 徵償處分

第四十五條 刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人  
ニ科ス但其費用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四十六條 犯人刑ニ處セラレ又ハ放免セラレト雖  
モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ免カ  
ル、トヲ得ス

第四十七條 數人共犯ニ係ル裁判費用贓物ノ還給損害  
ノ賠償ハ共犯人ヲシテ之ヲ連帶ヒシム

第四十八條 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者  
ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判スルヲ得

若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直チニ  
之ヲ被害者ニ還付ス

第五節 刑期計算

第四十九條 刑期ヲ計算スルニ一日ト稱スルハ二十四  
時ノ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱  
マルハ曆ニ從フ

受刑ノ初日ハ時間ヲ論セス一日ニ算入シ放免ノ日ハ  
刑期ニ算入セス

第五十條 刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之レヲ執  
行スルヲ得ス

第五十一條 刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算ス若シ上訴  
トナリ身持

欲娶安田吉  
兵衛之次女  
其人平素慎  
樸温良愷可  
相配得宜也  
廣東總保  
林雲池

○  
王佐賀縣八  
二月十五  
日同  
有祿士族實  
子ナク親族  
ヨリ養子致  
候處養父死  
去ノ後戶主

本部去  
馬  
七五

放蕩養母ヲ  
 侍養セス養  
 母ヨリ離縁  
 ノ儀示談致  
 シ候テモ養  
 子血統ノ縁  
 故ヲ以テ離  
 スルヲ肯ン  
 セス然ニ不  
 孝ノ罪ヲ官  
 ニ鳴シ候テ  
 ハ家名ニセ  
 關係候ニ付  
 依テ離縁致  
 度自養母ノ  
 親族連署願

ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ從フ  
 一犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算ス若シ其上訴不當ナル時ハ後判宣告ノ日ヨリ起算ス

二檢察官ノ上訴ニ係ル者ハ其上訴正當ナルト否トヲ分タス前判宣告ノ日ヨリ起算ス  
 三上訴中保釋ヲ得又ハ責付セラレタル者ハ其日數ヲ刑期ニ算入スルヲ得マ

第五十二條 刑期限内逃走シ再ヒ捕ニ就キタル者ハ其逃走ノ日數ヲ除キ前後受刑ノ日ヲ計算ス

第六節 假出獄

第五十三條 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ謹

出候節申立  
 ノ通相違無  
 之時ハ斷然  
 離縁申付相  
 續ノ儀ハ養  
 母ノ情願ニ  
 任セ可然ヤ  
 相伺候也  
 指令八年四  
 月七日  
 書面養子血  
 統ノ縁故ヲ  
 以テ離縁ヲ  
 肯ンセサル  
 正事實一家  
 ノ浮沈ニモ  
 關シ養母并

守シ峻改ノ狀アル時ハ其刑期四分ノ三ヲ經過スルノ後行政ノ處分ヲ以テ假ニ出獄ヲ許スヲ得  
 無期徒刑ノ囚ハ十五年ヲ經過スルノ後亦同シ  
 流刑ノ囚ハ第二十一條ニ照シ幽閉ヲ免スルノ外假出獄ノ例ヲ用ヒス

第五十四條 徒刑ノ囚ハ假出獄ヲ許サル、ト雖モ仍ホ島地ニ居住セシム

第五十五條 假出獄ヲ許サレタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルヲ得但本刑期限内特別ニ定メタル監視ニ附ス

第五十六條 假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入スルヲ

親族連署願

出候ハ、馬

ト取糺シノ

上離縁ノ儀

聞届不苦候

事

高根縣十年

八月

第一條 茲

ニ士族戸主

アリ他ヨリ

養子ニ來リ

シモノニテ

其妻ハ家女

ナリ而シテ

戸主身持放

ヲ得ス

第五十七條 刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假

出獄ヲ許サス

第七節 期滿免除

第五十八條 刑ノ執行ヲ道レタル者法律ニ定メタル期

限ヲ經過スルニ因テ期滿免除ヲ得

第五十九條 主刑ハ左ノ年限ニ從テ期滿免除ヲ得

一死刑ハ三十年 二無期徒流刑ハ二十五年

三有期徒流刑ハ二十年 四重懲役重禁獄ハ十五年

五輕懲役輕禁獄ハ十年 六禁錮罰金ハ七年

七拘留料料ハ一年

第六十條 剝奪公權停止公權及ヒ監視ハ期滿免除ヲ得

ス

附加ノ罰金ハ主刑ト共ニ期滿免除ヲ得

沒收ハ五年ヲ經テ期滿免除ヲ得但禁制物ハ期滿免除

ノ限ニ在ラス

第六十一條 期滿免除ハ刑ノ執行ヲ道レタル日ヨリ起

算ス若シ捕ニ就キ再ヒ逃走シタル時ハ其逃走ノ日ヨ

リ起算シ關帝裁判ニ係ル時ハ其宣告ノ日ヨリ起算ス

第六十二條 刑ノ執行ヲ道レタル者ニ對シ逮捕ヲ命シ

タル時ハ最終ノ令狀ヲ出シタル日ヨリ期滿免除ヲ起

算ス

第八節 復權

第六十三條 公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタ

本邦法律... 卷下

第... 條

蕩一家ノ浮

沈ニモ関ス

ル程ノ事情

アルモノハ

家ノ尊屬親

又ハ他ノ親

戚連署ニテ

右戸主ヲ廢

度旨出願ス

レハ可聽届

儀ニ候得共

今出願セン

トスルモ家

尊屬ナク他

ニ親戚アラ

ス去リトテ

婦ヨリ夫ノ放蕩ヲ鳴スハ千名犯義ニ涉リ爲スヲ得ヘカラス右等ハ赦ニアラサルモ保伍ノモノ不忠見ヲ以テ出願スレハ聽届可然哉

ル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後其情狀ニ因リ將來ノ公權ヲ復スルヲ得  
主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後亦同シ

第六十四條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ直チニ復權ヲ得特赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ赦狀中記載スルニ非サレハ復權ヲ得ス

赦ニ因テ復權ヲ得タル者ハ自ラ監視ヲ免シタル者トス

第六十五條 復權ハ勅裁ニ非サレハ之ヲ得可カラス

第三章 加減例  
第六十六條 法律ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ

場ヲ以テ戸主ノ放蕩ヲ申立テ廢シ度旨出願致候儀ハ不告哉然ルハ保伍ノ連署アレハ聽許可然哉

第六十七條 重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑  
二無期徒刑  
三有期徒刑  
四重懲役  
五輕懲役

第六十八條 國事ニ關スル重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑  
二無期徒刑  
三有期徒刑  
四重禁獄  
五輕禁獄

第六十九條 輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

輕禁獄ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ

本邦法典編纂會

哉 輕禁錮ニ處スルヲ以テ一等トナス

指令十年七月二十七日 第八日 第七十條 禁錮罰金ニ該ル者減輕ス可キ時ハ各本條ニ

書面保伍ノ者ノ出願ニテハ難聞届候得共養實

ト爲シ其加重ス可キ時ハ亦四分ノ一ヲ加フルヲ以テ

一等ト爲ス

輕罪ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルヲ得ス但禁錮ハ加ヘ

テ七年ニ至ルヲ得

第七十一條 禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處シ罰金ヲ

減盡シタル時ハ料料ニ處ス禁錮罰金ヲ減シテ其短期

十日以下寡數一圓九十五錢以下ニ及フ時ハ亦拘留料

料ニ處スルヲ得

第七十二條 拘留料料ニ該ル者加減ス可キ時ハ禁錮罰

可申事

○ 生白河縣十年十二月七日

長男分家或ハ他家へ養子ニ遣ハシ候儀ハ兼テ不相成御規

則ノ虞警ハ甲家ニ乙ノ家ヨリ縁付

男子出生後 事故有之離縁ノ際右幼

兒ヲ妻ト共ニ引取度雙

金ノ例ニ照シ其四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲

違警罪ノ刑ハ加ヘテ輕罪ニ入ルヲ得ス但拘留ハ加

ヘテ十二日ニ至ルヲ得減シテ一日以下ニ降スヲ

得ス料料ハ加ヘテ貳圓四十錢ニ至ルヲ得減シテ五

錢以下ニ降スヲ得ス

第七十三條 禁錮拘留ヲ加減スルニ因テ其期限ニ零數

ヲ生シ一日ニ滿サル時ハ之ヲ除棄ス

第七十四條 附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ其金額ノ

四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス若シ減盡シタ

ル時ハ止タ主刑ヲ科ス

第四章 不論罪及ヒ減輕

本部法令抄要 卷下 第九

第一節 不論罪及ヒ減輕

方熟識ノ上  
出願候ハ、  
間屆不苦候  
ハ相同候也

指令<sup>八年五月五日</sup>  
書面伺ノ趣  
離縁ノ妻長  
男ヲ連レ歸

リ候儀ハ不  
相成候事

但疾病等ノ

事故ヲ以テ

相續人ニ不

相立者ハ連

レ歸リ不苦

候事

第七十五條 抗拒ス可カラサル強制ニ遇ヒ其意ニ非サルノ所爲ハ其罪ヲ論セス

天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル危難ニ遇ヒ自己若クハ親屬ノ身體ヲ防衛スルニ出タス所爲亦同シ

第七十六條 本屬長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者ハ其罪ヲ論セス

第七十七條 罪ヲ犯ス意ナキノ所爲ハ其罪ヲ論セス但法律規則ニ於テ別ニ罪ヲ定メタル者ハ此限ニ在ラズ罪ト爲ル可キ事實ヲ知ラスシテ犯シタル者ハ其罪ヲ論セス

宮崎縣<sup>八年三月廿七日</sup>

同ノ内

養子不埒又

ハ家法ニ不

相叶其妻モ

他ヨリ娶リ

タル者ニテ

夫婦共離別

致シ候節養

子ノ男子殘

シ置候テハ

同人養祖父

或ハ實父ハ

對シ苦情有

之者於其家

一旦嫡孫ノ

罪本重カル可クシテ犯ス時知ラサル者ハ其重キニ從テ論スルヲ得ス

法律規則ヲ知ラサルヲ以テ犯スノ意ナシト爲スヲ得ス

第七十八條 罪ヲ犯ス時知覺精神ノ喪失ニ因テ是非ヲ辨別セサル者ハ其罪ヲ論セス

第七十九條 罪ヲ犯ス時十二歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ論セス但滿八歳以上ノ者ハ情狀ニ因リ滿十六歳ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヲ得

第八十條 罪ヲ犯ス時滿十二歳以上十六歳ニ滿サル者ハ其所爲是非ヲ辨別シタルト否トヲ審案シ辨別ナクシテ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ滿二十



名義有之ト  
雖養父存慮  
次第男子共  
離別ニ及不  
普候哉

指合八年五  
日  
養父ノ存慮  
ヲ以テ嫡孫  
ヲ離別致候  
儀不相成候  
條若不得止  
事故有之養  
實ニ家熟識  
ノ上夫妻ノ  
内何レ一方  
ハ連レ歸リ

歳ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヲ得  
若シ辨別アリテ犯シタル時ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ  
二等ヲ減ス

第八十一條 罪ヲ犯ス時満十六歳以上二十歳ニ満サル  
者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス

第八十二條 瘖啞者罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但  
情狀ニ因リ五年ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置ス  
ルヲ得

第八十三條 違警罪ハ満十六歳以上二十歳ニ満サル者  
ト雖モ其罪ヲ宥恕スルヲ得ヌ

満十二歳以上十六歳ニ満サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本  
刑ニ一等ヲ減ヌ十二歳ニ満サル者及ヒ瘖啞者ハ其罪

ヲ論セス

第八十四條 此節ニ記載スルノ外特別ノ不論罪宥恕減  
輕ハ各本條ニ於テ之ヲ記載ス

第二節 自首減輕

第八十五條 罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ  
自首シタル者ハ本刑ニ一等ヲ減ヌ但謀殺故殺ニ係ル  
者ハ自首減輕ノ限ニ在ラス

第八十六條 財産ニ對スル罪ヲ犯シタル者自首シテ其  
贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル時ハ自首減等ノ外仍  
ホ本刑ニ二等ヲ減ヌ其全部ヲ還償セスト雖モ半数以  
上ヲ還償シタル時ハ一等ヲ減ヌ

第八十七條 財産ニ對スル罪ヲ犯シ被害者ニ首服シタ

度旨本人及  
親族連署出  
願ノ上其情  
實不得止ニ  
於テハ聞届  
不苦候事  
但シ本文ノ  
養子ト主  
ル時離縁ニ  
及候節ハ嫡  
子連歸リ候  
儀不相成候  
事

高知縣八年  
七月

廿三日  
同ノ内

配偶ノ婚養

本邦法典

第...條

子不得事故 有之養子離 縁ノ節養實 西親協議ノ 上養家ニテ 配偶ノ妻並 生子ヲ連歸 リ度情願ノ 者其妻ハ聞 届不苦候得 共其生子ハ 嫡孫ノ儀ニ 付難聞届儀 ト相心得可 然哉

ル者ハ官ニ自首スルト同ク前二條ノ例ニ照シテ處斷ス  
第八十八條 此節ニ記載スルノ外本條別ニ自首ノ例ヲ 掲ケタル者ハ各其本條ニ從フ

第三節 酌量減輕

第八十九條 重罪輕罪違警罪ヲ分タス所犯情狀原諒ス 可キ者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スルヲ得 法律ニ於テ本刑ヲ加重シ又ハ減輕ス可キ者ト雖モ其 酌量ス可キ時ハ仍ホ之ヲ減輕スルヲ得

第九十條 酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ 減ス  
第五章 再犯加重

指念 八年十月十

五 書面妻 并生子共養 實ニ家協議 未願出其 事情不得已 二於テハ聞 届不苦候條 妻ハ更ニ養 子ノ實家ヘ 嫁候儀ト可 相心得事 但其婚養子 戶主ニ候ヘ 長男ヲ連 レ取ル義ハ 不相成事

第九十一條 先ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯重罪 二該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十二條 先ニ重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯 輕罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十三條 先ニ違警罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯違 警罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ但一年内再ヒ其違 警罪裁判所ノ管轄地内ニ於テ犯シタル時ニ非サレハ 再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十四條 再犯加重ハ初犯ノ裁判確定ノ後ニ非ケレ

第九十五條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯スニ因リ刑ヲ宣告シ

タル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服

タル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服

タル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服

タル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服

タル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服

タル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服

タル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服

タル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服

タル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服

タル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服

タル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服

百川 八年十月

八日 伺

第一條 婚

養子ノ者未

タ戸主ニ不

相立内男女

數名出生其

後離縁スル

ニ其子ハ男

女子ヲ不論

都テ養家ニ

殘シ置キ養

父ノ處分ニ

任セ候方至

當ニ可有之

候得共雙方

セサル者ヲ後ニス若シ初犯再犯共ニ定役ニ服スル刑

ニ該ル時又ハ共ニ定役ニ服セサル刑ニ該ル時ハ先ツ

其重キ者ヲ執行ス

罰金科料ニ該ル者ハ順序ニ拘ハラス各之ヲ徵收ス

第九十六條 陸海軍裁判所ニ於テ判決ヲ經タル者再ヒ

重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ初犯ノ罪常律ニ從ヒ處斷シ

タル者ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十七條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ再ヒ罪ヲ犯

スト雖モ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十八條 三犯以上ノ者ト雖モ其加重ノ法ハ再犯ノ

例ニ同シ

第六章 加減順序

第九十九條 犯罪ノ情狀ニ因リ總則ニ照シ同時ニ本刑

ヲ加重減輕ス可キ時ハ左ノ順序ニ從テ其刑名ヲ定ム

但從犯及ヒ未遂犯罪ノ減等其他各本條ニ記載スル特

別ノ加重減輕ハ其加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

一再犯加重

二宥恕減輕

三自首減輕

四酌量減輕

第七章 數罪俱發

第一百條 重罪輕罪ヲ犯シ未タ判決ヲ經スニ罪以上俱ニ

發シタル時ハ一ノ重キニ從テ處斷ス

重罪ノ刑ハ刑期ノ長キ者ヲ以テ重ト爲シ刑期ノ等シ

キ者ハ定役アル者ヲ以テ重ト爲ス

輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最重キ者ニ從テ處斷ス

熟談ノ上ハ  
父ト共ニ實  
家ヘ引取候  
儀不苦候哉  
且右等ノ養  
子當時戶主  
ニ相立居候  
處已ハヲ得  
サル事故ア  
ツテ雙方熟  
識上養父母  
ヨリ離縁候  
節出生ノ子  
處分ノ儀モ  
同様ニテ可  
然哉

但離縁後  
養子殘置候  
男女子幼稚  
或ハ廢篤疾  
ニテ跡相續  
スルヲ不得  
右等ノ節他  
ヨリ再養子  
致シ寡婦家  
ナニ娶セ候  
節養子ヨリ  
妻ノ子ヲ指  
如何相唱可  
申哉

トナリ男子  
出生ノ後退  
隱候カ或ハ  
病死候節長  
男ハ幼少先  
養子ノ子ハ  
丁壯然レ正  
長男ハ相續  
願出候節ハ  
無論聞届候  
方ト存候得  
共熟談ノ上  
ハ先養子ノ  
子ハ相續致  
サセ候儀モ  
不苦候ヤ

第百一條 違警罪ニ罪以上俱ニ發シタル時ハ各其刑ヲ  
科ス若シ重罪又ハ輕罪ト俱ニ發シタル時ハ一ノ重キ  
ニ從フ

第百二條 一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ  
其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論セス其重キ者ハ更ニ  
之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス但前發ノ  
刑罰金科料ニ該リ已ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ  
例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス

若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪再犯ノ罪  
ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ  
前發ノ刑ヲ通算セス

第百三條 數罪俱ニ發シ一ノ重キニ從フ時ト雖モ其没  
收及ヒ微償ノ處分ハ各本法ニ從フ

第八章 數人共犯

第一節 正犯

第百四條 二人以上現ニ罪ヲ犯シタル者ハ皆正犯ト爲  
シ各自ニ其刑ヲ科ス

第百五條 人ヲ教唆シテ重罪輕罪ヲ犯サシメタル者ハ  
亦正犯ト爲ス

第百六條 正犯ノ身分ニ因リ別ニ刑ヲ加重ス可キ時ハ  
他ノ正犯從犯及ヒ教唆者ニ及ホスヲ得ス

第百七條 犯人ノ多數ニ因リ刑ヲ加重ス可キ時ハ教唆  
者ヲ算入シテ多數ト爲スヲ得ス

第百八條 事ヲ指定シテ犯罪ヲ教唆スルニ當リ犯人教

但執カ相續候節戶籍上肩書如何記載候哉且忌服儀ハ異父兄弟ノ處ヲ以テ相互ニ爲受可然哉

指令八月二十九日

第一條 戶主ニ立サル養子離縁ノ際其子ノ處分ハ養實ニ

咬ニ乘シ其指定シタル以外ノ罪ヲ犯シ又ハ其現ニ行フ所ノ方法教唆者ノ指示シタル所ト殊ナル時ハ左ノ例ニ照シテ教唆者ヲ處斷ス  
一 所犯教唆シタル罪ヨリ重キ時ハ止タ其指定シタル罪ニ從テ刑ヲ科ス  
二 所犯教唆シタル罪ヨリ輕キ時ハ現ニ行フ所ノ罪ニ從テ刑ヲ科ス

第二節 從犯

第百九條 重罪輕罪ヲ犯スルヲ知テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス但正犯現ニ行フ所ノ罪從犯ノ知ル所ヨリ重キ

家ノ協議ニ任セ不苦候ハ正既ニ戶主ニ立レ養子離縁ノ節嫡子連レ歸リ候儀ハ不相成候

但書ノ趣男女兒有之寡婦ハ後婚ヲ迎アル儀ハ不相成例規ニ候若シ其遺子廢篤疾等ニテ相續

時ハ止タ其知ル所ノ罪ニ照シ一等ヲ減ス

第百十條 身分ニ因リ刑ヲ加重ス可キ者從犯ト爲ル時其重キニ從テ一等ヲ減ス

正犯ノ身分ニ因リ刑ヲ減免ス可キ時ト雖正犯ノ刑ハ其輕キニ從テ減免スルヲ得ス

第九章 未遂犯罪

第百十一條 罪ヲ犯サントシテ謀リ又ハ其豫備ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル者ハ本條別ニ刑名ヲ記載スルニ非サレハ其刑ヲ科セス

第百十二條 罪ヲ犯サントシテ已ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂ケサル時ハ已ニ遂ケサル者ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

ニ立カタキ  
事故コレア  
リ親族會議  
連署出願ニ  
候ハ、篤ト  
其事實ヲ亂  
シ確ト相違  
ナキニ於テ  
ハ其寡婦離  
縁ヲ受レ日  
ヨリ三百日  
ヲ過キ候ハ  
後婚ヲ迎  
ヘ不普允遺  
胤ノ徵ナキ  
旨二人以上

第百十三條 重罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ前

條ノ例ニ照シテ處斷ス

輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ本條別ニ記載  
スルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ得ル  
違背罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ其罪ヲ論セス

第十章 親屬例

第百十四條 此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シ

タル者ヲ云フ

- 一 祖父母父母夫妻
- 二 子孫及ヒ其配偶者
- 三 兄弟姉妹及ヒ其配偶者
- 四 兄弟姉妹ノ子及ヒ其配偶者
- 五 父母ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

ノ證人アル  
者ハ此限ニ  
非ス且稱呼  
ノ儀ハ後夫  
ヨリ前夫ノ  
子ト呼ヒ其  
兒ヨリ後夫  
ヲ指シ繼父  
ト可稱事

第百十五條 祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同

シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト稱スルハ庶

子曾玄孫外孫同シ兄弟姉妹ト稱スルハ異父異母ノ兄

弟姉妹同シ

養子其養家ニ於ル親屬ノ例ハ實子ニ同シ

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

篤疾等不得  
止事故アツ  
テ相續ニ立  
難キ庶ヲ以

出願ノ上其 第百十六條 天皇三后皇太子ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加  
母ヘ後夫ヲ 迎候次第ニ 付無論家督  
ハ現戸主ノ後 夫嫡子ニ繼 承イタサセ  
可然候併シ 養實ニ家ノ 協議ニヨリ  
前夫ノ遺子 疾病平愈ノ 上相續ニ相  
立度儀願出 候ハ、開届 不告候事

第百十七條 天皇三后皇太子ニ對シ不敬ノ所爲アル者  
ハ三月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百  
圓以下ノ罰金ヲ附加ス

皇陵ニ對シ不敬ノ所爲アル者亦同シ

第百十八條 皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處  
ス其危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第百十九條 皇族ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ二月以上  
四年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ  
附加ス

第百二十條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處

スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二章 國事ニ關スル罪

第一節 内亂ニ關スル罪

第百二十一條 政府ヲ顛覆シ又ハ邦土ヲ僭竊シ其他朝  
憲ヲ紊亂スルヲ目的ト爲シ内亂ヲ起シタル者ハ左  
ノ區別ニ從テ處斷ス

一 首魁及ヒ教唆者ハ死刑ニ處ス

二 群衆ノ指令ヲ爲シ其他樞要ノ職務ヲ爲シタル者ハ  
無期流刑ニ處シ其情輕キ者ハ有期流刑ニ處ス

三 兵器金穀ヲ資給シ又ハ諸般ノ職務ヲ爲シタル者ハ  
重禁獄ニ處シ其情輕キ者ハ輕禁獄ニ處ス

四 教唆ニ乘シテ附加隨行シ又ハ指揮ヲ受ケテ雜役ニ

但書ノ趣ハ 後夫ノ子ヲ 相續爲致候 時ハ普通父 子相續ノ書 式ニ可照準 若シ前父ノ 子ヲ相續ニ 相立候ハ、 左ノ書式ノ 通可相認且 服忌ノ儀ハ 伺ノ通クル へキ事 前父ノ遺子 ヲ以テ後夫

ノ家督ヲ繼承セシムル書式

實父其長男

繼父其亡相續

苗字名

何十年何月何十七日

東京府十九年

同

第一條 甲

家ノ男子乙ナルモノ丙

家ノ婿養子ト爲リニ子

ト爲リニ子

供シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二百二十二條 内亂ヲ起スノ目的ヲ以テ兵器彈藥船舶

金穀其他軍備ノ物品ヲ劫掠シタル者ハ已ニ内亂ヲ起

シタル者ノ刑ニ同シ

第二百二十三條 政府ヲ變亂スルノ目的ヲ以テ人ヲ謀殺

シタル者、兵ヲ舉ルニ至ラスト雖モ内亂ト同ク論シ

其教唆者及ヒ下手者ヲ死刑ニ處ス

第二百二十四條 前三條ノ罪ハ未遂犯罪ノ時ニ於テ乃チ

本刑ヲ科ス

第二百五條 兵隊ヲ招募シ又ハ兵器金穀ヲ準備シ其

他内亂ノ豫備ヲ爲シタル者ハ第二百二十一條ノ例ニ照

シ各一等ヲ減ス

出生ノ後事故アリ離絶スルニ丙家

貧窮ニ子ヲ

養育スルノ

カナク雙方

協議ノ上

子丁ヲ乙引

連籍籍シ甲

家ノ養子又

ハ附籍ト爲

ス者アリ右

丁ノ籍面左

ノ通ニテ可

内亂ノ陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ各二等ヲ減ス

第二百二十六條 内亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ

其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ヲ

免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

第二百二十七條 内亂ノ情ヲ知テ犯人ニ集會所ヲ給與シ

タル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二百二十八條 内亂ニ乘シテ人ノ身體財産ニ對シ内亂

ノ目的ニ關セサル重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ通常ノ刑

ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二節 外患ニ關スル罪

第二百二十九條 外國ニ與シテ本國ニ抗敵シ又ハ外國ト



誰何、誰方  
離絶、節引  
連入籍  
附籍  
丙家ノ氏  
ヲ用ユ  
何、誰  
年月日何  
年月日何  
年月日實父  
誰何、誰方  
離絶、節引  
受人籍  
養子  
甲家ノ氏  
ヲ用ユ  
何、誰  
交戦中同盟國ニ抗敵シ其他本國ニ背叛シテ敵兵ニ附  
屬シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百三十條 交戦中敵兵ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシ  
ノ若クハ本國及ヒ同盟國ノ都府城塞又ハ兵器彈藥船  
艦其他軍事ニ關スル土地家屋物件ヲ敵國ニ交付シタ  
ル者ハ死刑ニ處ス

第三百三十一條 本國及ヒ同盟國ノ軍情機密ヲ敵國ニ漏  
泄シ若クハ兵隊屯集ノ要地又ハ道路ノ險夷ヲ敵國ニ  
通知シタル者ハ無期流刑ニ處ス

敵國ノ間諜ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ之  
ヲ藏匿シタル者亦同シ  
第三百三十二條 海陸軍ヨリ委任ヲ受ケ物品ヲ供給シ及

年月日何  
年何ケ月

第二條 婦

入他ニ嫁シ

子女出生ノ

後前條ノ始

ホニ至リ其

子女ノ内引

連レ實家ニ

復歸スル節

其子女籍面

ニ於テモ前

條ノ書式ヲ

用ヒ可然哉

指令 十年二

書面同ノ趣

連子ハ両家

ヒ工作ヲ爲ス者交戦ノ際敵國ニ通謀シ又ハ其賂遺ヲ  
收受シテ命令ニ違背シ軍備ノ缺乏ヲ致シタル時ハ有  
期流刑ニ處ス

第三百三十三條 外國ニ對シ私ニ戦端ヲ開キタル者ハ有  
期流刑ニ處ス其豫備ニ止ル者ハ一等又ハ二等ヲ減ス

第三百三十四條 外國交戦ノ際本國ニ於テ局外中立ヲ布  
告シタル時其布告ニ違背シタル者ハ六月以上三年以

下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百三十五條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ  
處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三章 靜謐ヲ害スル罪

第一節 兇徒聚衆ノ罪

協議ヲ以テ 貫受連越候 上戸主ノ續 柄ヲ以テ家 籍ニ編入額 書ニ連子 譯記載致置 候儀ト可相 心得養子ト 可爲者ハ其 譯詳細可伺 出事

第百三十六條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ暴動ヲ謀リ官吏ノ 說諭ヲ受クルト雖在仍ホ解散セサル者首魁及ヒ教唆 者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス附和隨行シタ ル者ハ二圓以上五圓以下ノ罰金ニ處ス

第百三十七條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ官廳ニ喧鬧シ官吏 ニ強逼シ又ハ村市ヲ騷擾シ其他暴動ヲ爲シタル者首 魁及ヒ教唆者ハ重懲役ニ處ス其嘯聚ニ應シ煽動シテ 勢ヲ助ケタル者ハ輕懲役ニ處シ其情輕キ者ハ一等ヲ 減ス附和隨行シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金 ニ處ス

第百三十八條 暴動ノ際人ヲ殺死シ若クハ家屋船舶倉 庫等ヲ燒燬シタル時ハ現ニ手ヲ下シ及ヒ火ヲ放ツ者

舅又ハ親戚 ヨリ其妻離 別里方ハ差 戻候儀不苦

ヲ死刑ニ處ス

首魁及ヒ教唆者情ヲ知テ制セサル者亦同シ

第二節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

第百二十九條 官吏其職務ヲ以テ法律規則ヲ執行シ又 ハ行政司法官署ノ命令ヲ執行スルニ當リ暴行脅迫ヲ 以テ其官吏ニ抗拒シタル者ハ四月以上四年以下ノ重 禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

暴行脅迫ヲ以テ其官吏ノ爲スハカラサル事件ヲ行ハ シメタル者亦同シ

第百四十條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ官吏ヲ毆傷シタル者 ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處 断ス

得事

五福島縣七年十二月四日

第一條 養子逃亡中離縁ノ儀ハ本年大政官日誌第九十五号司法省伺ヘノ御指令別紙寫ノ通有之候處妻或ハ嫁ナル者ニ至リテハ逃亡後ニ

第四百一十一條 官吏ノ職務ニ對シ其目前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テ侮辱シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書圖畫又ハ公然ノ演說ヲ以テ侮辱シタル者亦同シ

第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第四百十二條 已決ノ囚徒逃走シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲナシテ逃走シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百十三條 已決ノ囚徒逃走ノ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論セス其刑期限内再ヒ逃走シタル者ハ再犯ヲ

年外ヲ待々ス夫舅ノ心底ニヨリ夫家及ヒ實家熟議ハ勿論假令實家首セサルモ之レヲ官ニ訴ヘ離縁ノ上定規ノ尋方ヲモ實家ニ於テ爲シ可然ヤ又ハ養子ノ如ク相應ノ年限モ可有之哉

以テ論ス

第四百十四條 未決ノ囚徒入監中逃走シタル者ハ第四百四十二條ノ例ニ同シ但原犯ノ罪ヲ判決スル時ニ於テ數罪俱發ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百十五條 囚徒三人以上通謀シテ逃走シタル時ハ第四百四十二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第四百十六條 囚徒ヲ逃走セシムル爲メ兇器其他ノ器具ヲ給與シ又ハ逃走ノ方法ヲ指示シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス因テ囚徒ノ逃走ヲ致シタル時ハ一等ヲ加フ

第四百十七條 囚徒ヲ劫奪シ又ハ暴行脅迫ヲ以テ囚徒

之 第二條 前 條ノ場合ニ 至リ實家既ニ 斷絶スル 者ハ養子同 様本人復歸 スルヲ待テ 離別ノ節ニ 候哉然ル節 其夫後妻ヲ 娶リ候ニ夫 婦ノ縁末タ 斷セヌ一夫 兩妻ヲ有シ 候姿ニテ不

ノ逃走ヲ助ケタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ 處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ輕懲役ニ 處ス

第百四十八條 囚徒ヲ看守シ又ハ護送スル者囚徒ヲ逃 走セシメタル時ハ亦前條ノ例ニ同シ

第百四十九條 前數條ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシ テ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第百五十條 看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走 ヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以 上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

都合ニ有之 右ハ如何相 心得可然哉 指合ハ年十 十四 書面伺ノ趣 左ノ通可相 心得事

第百五十一條 犯罪人又ハ逃走ノ囚徒及ヒ監視ニ付セ ラレタル者ナルヲ知テ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシ メタル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓 以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ一等ヲ 加フ

第百五十二條 他人ノ罪ヲ免カレシメントテ圖リ其罪 證ト爲ル可キ物件ヲ隱蔽シタル者ハ十一日以上六月 以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附 加ス

第百五十三條 前二條ノ罪ヲ犯シタル者犯人ノ親屬ニ 係ル時ハ其罪ヲ論セス

第二條 婦

候事

ニ聞届不告

テ離届出

候得ハ期限

ヲ問ハス直

ノ存意ヲ以

テ離届出

候得ハ期限

ヲ問ハス直

ニ聞届不告

候事

第二條 婦

第四節 附加刑ノ執行ヲ道ルノ罪

ノ實家既ニ  
斷絶スル者  
ハ重立候親  
戚ハ附籍ス  
ヘク若シ附  
籍スヘキ親  
戚モ無之時  
ハ原籍地ノ  
戸長ヘ送籍  
スヘレ戸長  
役場ニ於テ  
ハ其地ノ戸  
籍簿ヘ記載  
シ置、キ事  
但原籍地不  
分明ノ者ハ

第百五十四條 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者私ニ其權ヲ行ヒタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十五條 監視ニ付セラレタル者其規則ニ違背シタル時ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第百五十六條 前二條ノ罪ハ其刑期限内再ヒ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス

第五節 私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪  
第百五十七條 官命ヲ受ケス又ハ官許ヲ得スシテ陸海軍ノ用ニ供スル銃砲彈藥其他破裂質ノ物品ヲ製造シ

夫家現在地ノ戸籍簿ニ記載スヘシ  
○  
タル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其之ヲ輸入シタル者亦同シ

前項ノ物品ヲ私ニ販賣シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十八條 前條ノ罪ヲ犯スト雖モ職工又ハ雇人ニシテ止タ正犯ノ使令ニ供シタル者ハ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百五十九條 前二條ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第百六十條 第百五十七條ニ記載シタル物品ヲ私ニ所有シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

（廿號前縣）  
五月廿四日  
養子脱籍行  
衛不相知節  
養父持實家  
申談離別致  
シ不苦候ヤ  
又ハ本人承  
諾ノ上ナラ  
テハ離縁相  
成數ヤ  
指令八年九  
月十四日  
法律  
九三  
島

前同斷二年以外ニ及ヒ復歸セサルハ養實ニ家申談ノ上解縁聞届不苦係事

第六節 往來通信ヲ妨害スル罪

第百六十二條 道路橋梁河溝港埠ヲ損壞シテ往來ヲ妨害シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百六十三條 偽計又ハ威カヲ以テ郵便ヲ妨害シ若クハ之ヲ阻止シタル者ハ亦前條ニ同シ

第百六十四條 電信ノ器械柱木ヲ損壞シ又ハ條線ヲ切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

ノ上可取計事

若シ器械柱木條線ヲ損壞シテ電信ノ妨害ヲ爲スト雖モ不通ニ至ラサル時ハ一等ヲ減ス

第百六十五條 汽車往來ヲ妨害スル爲メ鐵道及ヒ其標識ヲ損壞シ其他危險ナル障礙ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第百六十六條 船舶ノ往來ヲ妨害スル爲メ燈臺浮標其他航海ノ安寧ヲ保護スル標識ヲ損壞シ又ハ詐偽ノ標識ヲ點示シタル者ハ亦前條ニ同シ

第百六十七條 前數條ニ記載シタル罪其事務ニ關スル官吏及ヒ雇人職工自ラ犯シタル時ハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ

第百六十八條 第百六十二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ殺傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷

貴置候養女於テ養父ノ

○ 新川縣 八 年 十一月 八日 伺

養父血縁ノ者ヲ養女ニ

貴受置其後

養子致シ右

養女ト結婚シ已ニ養父死後ニ至リ離縁ノ儀申立候節夫ニ於テ養父ノ貴置候養女

ヲ其實家へ  
可差戻ノ權  
理可有之哉  
且家女離縁  
ノ内ニ做ヒ  
御省日誌本  
年第二十三  
号廣島縣伺  
御指令ニ照  
準シ雙方曲  
直取調不得  
已事故有之  
候ハ、離縁  
聞届養女ハ  
其家ニ差置  
可申哉頃日

第百六十九條 第百六十五條第百六十六條ノ罪ヲ犯シ  
因テ瀆車ヲ顛覆シ又ハ船舶ヲ覆没シタル時ハ無期徒刑ニ處シ人ヲ死ニ致シタル時ハ死刑ニ處ス  
第百七十條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未  
夕遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス  
第七節 人ノ住所ヲ侵ス罪  
第百七十一條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人  
ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ十一日以上六月  
以下ノ重禁錮ニ處ス  
若シ左ニ記載シタル所爲アル時ハ一等ヲ加フ  
一 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開キテ入りタル

夫婦相互ニ  
申立候儀有  
之ニ付相伺  
候也  
指令六年十  
月十八日  
書面血縁ノ  
養女離縁ノ  
儀ハ惡疾ニ  
係ルカ或ハ  
倫理ヲ亂ル  
等ノ所業有  
之者ハ格別  
尋常ノ事故  
ノミニテハ  
難相成候條

時  
二 兇器其他犯罪ノ用ニ供ス可キ物品ヲ攜帶シテ入り  
タル時  
三 暴行ヲ爲シテ入りタル時  
四 二人以上ニテ入りタル時  
第百七十二條 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人  
ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ一月以上一年以上以  
下ノ重禁錮ニ處ス  
若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等  
ヲ加フ  
第百七十三條 故ナク皇居禁苑離宮行在所及ヒ皇陵内  
ニ入りタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪

猶事實取調  
相違ナキ  
親族連印ヲ  
以願出候ハ  
、離縁聞届  
不苦候尤其  
養女ハ其儘  
差置候カ又  
ハ實家ハ差  
戻候共雙方  
親族協議ニ  
任候様可致  
事

第百七十四條 官署ノ處分ニ因リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破棄シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ看守者自ラ犯シタル時ハ一等ヲ加フ

第百七十五條 官ノ封印ヲ破棄シテ其物件ヲ盜取シ又ハ毀壞シタル者ハ盜罪及ヒ毀壞ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第百七十六條 看守者其懈怠ニ因リ封印ヲ破棄シ又ハ其物件ヲ盜取毀壞スル犯入アルヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪

○  
二月十五  
日伺

第百七十七條 陸海軍ノ將校タル者出兵ヲ要求スル權

アル官省ヨリ其要求ヲ受ケ故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百七十八條 陸海軍ノ徵兵ニ編入セララルヘキ者身體ヲ毀傷シテ疾病ヲ作為シ其他詐偽ノ所爲ヲ以テ免役ヲ圖リタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ニ囑託シ其氏名ヲ詐稱シ代テ徵募ニ應セシメタル者亦同シ其囑託ヲ受ケテ徵募ニ應シタル者ハ第百三十一條ノ例ニ照シテ處斷ス

第百七十九條 醫師化學家其他職業ニ因リ官署ヨリ解

當主養子ニ  
テ妻ハ養家  
ノ女ニ候處  
天賦虛弱種  
々保養ヲ加  
フルト雖  
無其驗已  
ヲ得ス離縁  
ノ上右家女  
ハ他家ノ厄  
介附籍等ニ  
爲致度當主  
及親戚共ヨ  
リ願出候節  
ハ士民ノ別  
ナク聞届不



苦候ヤ相伺候也  
指念八月十四日  
書面養家ノ妻離縁ノ儀ハ容易ニ難相成筋ニ候得共事實  
天性虛弱等ノ故ヲ以テ不得止夫婦ノ縁義相斷チ候儀ハ苦カラスト雖  
氏無謂他附籍為致候儀

剖分析又ハ鑑定ヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス  
第百八十條 裁判所ヨリ證人トシテ證據ヲ陳述スルヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ前條ニ同シ  
第百八十一條 傳染病流行ノ際又ハ傳染病ノ疑アル船舶入港スルニ當リ醫師其病患ヲ検査シ又ハ消滅ノ方法ヲ陳述スルヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス  
獸類傳染病流行ノ際獸醫此條ノ罪ヲ犯シタル時ハ一等ヲ減ス  
第四章 信用ヲ害スル罪

第一節 貨幣ヲ偽造スル罪

ハ難相成候條此旨可相心得若又家女ノ清願ニヨリ當主及親族連署ノ上願出候ハ可致允許事  
廣島縣八年七月日  
養家相續ノ者家女ヲ妻ニ致居候處ニ其妻病氣ニテ本復ノ期

第百八十二條 内國通用ノ金銀貨及ヒ紙幣ヲ偽造シテ行使シタル者ハ無期徒刑ニ處ス  
若シ變造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス  
第百八十三條 内國ニ於テ通用スル外國ノ金銀貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ有期徒刑ニ處ス  
若シ變造シテ行使シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百八十四條 官許ヲ得テ發行スル銀行ノ紙幣ヲ偽造シ若クハ變造シテ行使シタル者ハ内外國ノ區別ニ從ヒ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス  
第百八十五條 内國通用ノ銅貨ヲ偽造シテ行使シタル

無之歟或ハ

不得止事故

有之夫レカ

爲メ家事差

支候類本人

ハ勿論雙方

親族協議ノ

上其妻ヲ離

縁致シ年長

ナレハ姉年

若ナレハ妹

ト唱置花日

外方ハ縁付

ケ候テモ不

苦ヤ此節伺

出候者有之

者ハ輕懲役ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ一年以上三年以下ノ重

禁錮ニ處ス

第百八十六條 前數條ニ記載シタル貨幣ノ偽造變造已

ニ成テ未タ行使セサル者ハ各本刑ニ照シ一等ヲ減シ

其未タ成ラサル者ハ二等ヲ減ス

若シ偽造ノ器械ヲ豫備シテ未タ著手セサル者ハ各三

等ヲ減ス

第百八十七條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ雇ヲ受

ケタル職工ハ前數條ニ記載シタル犯人ノ受ク可キ刑

ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ職工ノ補助ヲ爲シテ雜役ニ供シタル者ハ職工ノ刑

ニ付相伺候

也

指合ハ年五

日書面家

女ノ妻離縁

ノ儀ハ或ハ

惡疾ニ係ル

カ或ハ倫理

ヲ犯ス等ノ

所業有之者

ハ格別尋常

ノ事故ノミ

ニテハ離縁

候儀ハ難相

成候條猶事

實取調相違

ニ照シ一等又ハ二等ヲ減ス

第百八十八條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ房屋ヲ

給與シタル者ハ偽造變造ノ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百八十九條 偽造變造ノ貨幣ヲ内國ニ輸入シタル者

ハ偽造變造ノ刑ニ同シ

第百九十條 偽造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ收受シ之ヲ

行使シタル者ハ偽造變造シテ行使シタル者ノ刑ニ照

シ各二等ヲ減ス

其未タ行使セサル者ハ各三等ヲ減ス

第百九十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑

ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第百九十二條 貨幣ヲ偽造變造シ及ヒ輸入收受シタル

ノキ一親族  
協議ノ上願  
出候ハ、聞  
届不苦候事  
但離縁ノ家  
女ハ全ク他  
人ニテ姉妹  
ト致シ候義  
ハ無之且忌  
服モ相互ニ  
不可受事  
石川縣六甲  
十八日  
聖養子ノ當  
主事故有之  
夫婦ノ際離

者未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑  
ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス  
若シ職工雜役及ヒ房屋ヲ給與シタル者未タ行使セサ  
ル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第百九十三條 貨幣ヲ收受スルノ後ニ於テ偽造又ハ變  
造ナルコトヲ知り之ヲ行使シタル者ハ其價額ニ倍ノ罰  
金ニ處ス但其罰金ハ二圓以下ニ降スコトヲ得ス

第二節 官印ヲ偽造スル罪

第百九十四條 御璽國璽ヲ偽造シ又ハ偽璽ヲ使用シタ  
ル者ハ無期徒刑ニ處ス

第百九十五條 各官署ノ印ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用  
シタル者ハ重懲役ニ處ス

縁ニ及候節  
其婦ハ當主  
ノ爲ノニハ  
養考姉妹ノ  
名義相立可  
申哉ノ旨明  
治六年十月  
二十八日附  
ヲ以テ同候  
處養子ノ當  
主賣家へ返  
身セス依然  
同一家族ニ  
連リ俱ニ其  
父母ヲ戴キ  
居候トモ離

第百九十六條 產物商品等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ  
偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ輕懲役ニ處ス  
書籍什物等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其  
偽印ヲ使用シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ  
處ス

第百九十七條 御璽國璽官印記號印章ノ影蹟ヲ盗用シ  
タル者ハ前數條ニ記載シタル偽造ノ刑ニ照シ各一等  
ヲ減ス

若シ監守者自ラ犯シタル時ハ偽造ノ刑ニ同シ  
第百九十八條 官ヨリ發行スル各種ノ印紙界紙及ヒ郵  
便切手ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使用シタル  
者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十

縁ノ家女ハ全ク他人ニテ姉妹ト為スヘキ筋無之旨御指令有之然ルニ士族寺西直一ナル者ヨリ離縁ノ上養姉ト致度旨別紙ノ通出願ニ付尚取調候處右ハ婚儀未整ノ者ニ付少ク異同ニ可

圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百九十九條 已ニ貼用シタル各種ノ印紙及ヒ郵便切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節 官ノ文書ヲ偽造スル罪

第二百二條 詔書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

其詔書ヲ毀棄スル者亦同シ

第二百三條 官ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其官ノ文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百四條 公債證書地券其他官吏ノ公證シタル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

若シ無記名ノ公債證書ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第二百五條 官吏其管掌ニ係ル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

其文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百六條 官ノ文書ヲ偽造スルニ因テ官印ヲ偽造シ又ハ盗用シタル者ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ

有之哉先般當縣及名東縣ハノ御指令ニ私生子有之婦女夫ヲ迎ヘ又孀婦連レ子致シ他ヘ嫁娶ノ節其現夫ノ約定ニ因リ養子等各種ノ名ヲ生スヘキ旨ヲ參考傍例仕候ハハ離縁ノ夫ヨリ

願次第ニテ

更ニ姉妹ノ

稱ヲ立テ不

當或別紙

指金八年十

五書面寺

西直一情願

ノ儀ハ婚儀

未整ノ者ニ

候條聞届不

告候事

○

重天坂府九

十二月廿

二日伺

夫婦ノ間一

男子アリ然

從テ處斷ス

第二百七條

此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四節 私印私書ヲ偽造スル罪

第二百八條

他人ノ私印ヲ偽造シテ使用シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ノ印影ヲ盗用シタル者ハ一等ヲ減ス

第二百九條 爲替手形其他裏書ヲ以テ賣買ス可キ證書

若クハ金額ト交換ス可キ約定手形ヲ偽造シ又ハ増減

變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其手形證書ニ詐偽ノ裏書ヲ爲シテ行使シタル者亦同

ル處妻病死

ニ因テ後日

後妻ヲ娶ル

ニ一女子ヲ

誘ハ來リ養

女ノ名ヲ以

テ入籍ス追

テ右ノ男女

子結婚セシ

メント願フ

者ハ養女ナ

ルヲ一旦斷

縁シ他ノ養

女トセシ上

結婚爲致可

然ヤ相伺候

シ

第二百十條

賣買貸借贈遺交換其他權利義務ニ關スル證書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ四月

以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ

罰金ヲ附加ス

其餘ノ私書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者

ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓

以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百十一條

此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百十二條

此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者、六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

也

指金十年二  
書面同ノ通

尤縁女ノ名

義ヲ以テ入

籍爲致置候

ハ、更ニ他

ノ養女トナ

スニ不及候

事

○  
置若手縣八  
一月伺  
内日ヲ欠

養父ノ長女

ヲ妻トシ其

妻死シテ次

第五節 免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪

第二百十三條 官ノ免狀又ハ鑑札ヲ偽造シ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官印ヲ偽造シ又ハ盗用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シテ處斷ス

第二百十四條 屬籍身分氏名ヲ詐稱シ其他詐偽ノ所爲ヲ以テ免狀鑑札ヲ受ケタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス官吏情ヲ知テ其免狀鑑札ヲ下付シタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十五條 公務ヲ免カル可キ爲メ醫師ノ氏名ヲ用ヒ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者ハ自己ノ爲メ

女ヲ再配セ  
ントスルモ  
ノハ一旦他  
家ノ養女ト  
爲シ改テ娶  
リ候儀ハ兼  
テ御指令モ  
有之儀ニ候  
得共前條ニ  
モ記載候通  
縱令一旦他  
ノ養女ト爲  
モ戸籍面ニ  
於テハ養實  
ノ譯記載候  
儀ニ付其實

ニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス一月以上一年以下ノ

重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

醫師囑託ヲ受ケテ其詐偽ノ證書ヲ造リタル者ハ一等

ヲ加フ

第二百十六條 陸海軍ノ徵兵ヲ免カル可キ爲メ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者及ヒ囑託ヲ受ケテ詐偽ノ證書ヲ造リタル醫師ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百十七條 免狀鑑札及ヒ疾病ノ證書ヲ増減變換シテ行使シタル者ハ亦偽造ノ刑ニ同シ

第六節 偽證ノ罪

第二百十八條 刑事ニ關スル證人トシテ裁判所ニ呼出

ハ養家妹ノ  
續キナル  
分明候得共  
是又不得止  
場合ニ付戸  
籍面ノ譯書  
ニ不付一時  
他家ノ名目  
ヲ掲ル上ハ  
不告儀ト相  
心得可然哉  
指合八年十  
日 同之通  
節磨懸八年  
月四日  
同ノ内  
他家ノ養女

サレタル者被告人ヲ曲庇スル為メ事實ヲ掩蔽シテ偽  
證ヲ為シタル時ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス  
一重罪ヲ曲庇スル為メ偽證シタル者ハ二月以上二年  
以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ  
附加ス  
二輕罪ヲ曲庇スル為メ偽證シタル者ハ一月以上一年  
以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ  
附加ス  
三違警罪ヲ曲庇スル為メ偽證シタル者ハ違警罪ノ本  
條ニ依テ處斷ス  
第二百十九條 偽證ノ為メ被告人正當ノ刑ヲ免カレタ  
ル時ハ偽證者ノ刑前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

タル者ヲ妻  
ニ娶リ候節  
事實ニ於テ  
ハ戸籍面養  
實兩家併記  
シ可然被存  
候得共御省  
日誌本年第  
一頁名東縣同  
書ハ御指合  
中養子タル  
モノ養父内  
名ヲ帶スル  
理ハ無之云  
々トアルニ  
基テハ最前

第二百二十條 被告人ヲ陷害スル為メ偽證ヲ為シタル  
者ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス  
一重罪ニ陷ラシムル為メ偽證シタル者ハ二年以上五  
年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金  
ヲ附加ス  
二輕罪ニ陷ラシムル為メ偽證シタル者ハ六月以上二  
年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金  
ヲ附加ス  
第二百二十一條 偽證ノ為メ被告人刑ニ處セラレタル  
後ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ偽證者ヲ其刑ニ反  
坐ス若シ反坐ノ刑前條ニ記載シタル偽證ノ刑ヨリ輕  
キ時ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

ノ養家ハ斷  
縁ノ上一旦  
實家へ立戻  
リ實家ヨリ  
娶ヘキ筋ニ  
可有之然ル  
ニ養家ノ妹  
ヲ娶リ候儀  
一旦他ノ養  
女トシ改  
メテ娶リ候  
ハ不苦旨明  
治六年八月  
二十七日廣  
島縣向ハ正  
院御指令ノ

其刑期限内ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ現ニ經過  
シタル日數ニ照シテ反坐ノ刑期ヲ減スルヲ得但減  
シテ前條偽證ノ刑ヨリ降スルヲ得ス  
第二百二十二條 偽證ノ爲メ被告人死刑ニ處セラレタ  
ル時ハ反坐ノ刑一等ヲ減ス其未タ刑ヲ執行セサル前  
ニ於テ發覺シタル時ハ二等ヲ減ス  
若シ被告人ヲ死ニ陥ルノ目的ヲ以テ偽證ヲ爲シタ  
ル時ハ死刑ニ反坐ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ  
發覺シタル時ハ一等ヲ減ス  
第二百二十三條 民事商事又ハ行政裁判ニ關シテ偽證  
ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五  
圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

趣モ有之是  
等ハ如何處  
分可然哉  
指全八月二十  
日五  
養子タル者  
養父兩名ヲ  
帶スル理ハ  
無之云々ト  
アルハ廣島  
縣ハ正院御  
指令ノ趣上  
其旨意自ラ  
異ナリ同縣  
ノ伺ハ養父  
兩名帶スル

第二百二十四條 鑑定又ハ通事ノ爲メ裁判所ニ呼出サ  
レタル者詐偽ノ陳述ヲ爲シタル時ハ前數條ニ記載シ  
タル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス  
第二百二十五條 賄賂其他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ  
偽證又ハ詐偽ノ鑑定通事ヲ爲サシメタル者ハ亦偽證  
ノ例ニ同シ  
第二百二十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者其  
事件ノ裁判宣告ニ至ラサル前ニ於テ自首シタル時ハ  
本刑ヲ免ス  
第七節 度量衡ヲ偽證スル罪  
第二百二十七條 度量衡ヲ偽證シ又ハ變造シテ販賣シ  
タル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上

本邦法律彙編



一ニハ不相  
當儀ト可心  
得事

高根縣九年

同十八日

第二條 長

女ニ嫁養子

ヲナシ其長

女死去ニ付

次女ヲ一旦

他ノ養女ト

ナシ更ニ養

子ト結婚ス

ルモノ

第三條 長

男ニ他ノ女

五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官ノ記號印章ヲ偽造シ  
スハ盜用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ  
從テ處斷ス

第二百二十八條 偽造變造ノ情ヲ知テ其度量衡ヲ販賣

シタル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ減ス

第二百二十九條 商賈農工定規ヲ増減シタル度量衡ヲ

所有シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二

圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ其度量衡ヲ使用シテ利ヲ得タル者ハ詐欺取財ヲ

以テ論ス

第二百三十條 入ノ囑託ヲ受ケテ度量衡ヲ偽造シ又ハ

變造シタル者ハ其囑託シタル犯人ノ刑ニ照シ各一等

ヲ娶リ其女

死去ニ付更

ニ其女ノ姉

妹ヲ娶ルモ

ノ

指令九年九

月二十

日ニ

第二條 一

旦他ノ養女

トナシ結婚

不苦候事

第三條 結

婚不苦候事

高根縣十年

六月

同十二日

客年六月舊

ヲ減ス

第八節 身分ヲ詐稱スル罪

第二百三十一條 官署ニ對シ文書又ハ言語ヲ以テ其屬

籍身分氏名年齢職業ヲ詐稱シタル者ハ二圓以上二十

圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十二條 官職位階ヲ詐稱シ又ハ官ノ服飾徽章

若クハ内外國ノ勳章ヲ僭用シタル者ハ十五日以上二

月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ

附加ス

第九節 公選ノ投票ヲ偽造スル罪

第二百三十三條 公選ノ投票ヲ偽造シ又ハ其數ヲ増減

シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以

鳥取縣伺へ 養家ノ伯母 血内シハ一 旦他ノ養女 トスルモ妻 トスルヲ得 サル旨御指 令有之就テ ハ明治六年 七月廣島縣 伺養子ノ續 ニテ父母ヲ 除ク外都テ 一旦他ノ養 女トシ娶リ 候ハ不告旨

上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十四條 賄賂ヲ以テ投票ヲ爲サシメ又ハ賄賂ヲ受ケテ投票ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十五條 投票ヲ檢査シ及ヒ其數ヲ計算スル者其投票ヲ偽造シ又ハ増減シタル時ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十六條 調書ヲ作り投票ノ結局ヲ報告スル者其數ヲ増減シ其他詐偽ノ所爲アル時ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

酒井彪三編輯 大日本一統輿地分國圖 全部八十一枚

附ノ府縣五港ノ圖

- 東海道 十二枚
- 畿内 三枚
- 東山道 十二枚
- 北海道 十四枚
- 北陸道 五枚
- 山陰道 七枚
- 山陽道 八枚
- 南海道 六枚
- 西海道 九枚
- 琉球 三枚
- 大東全圖 壹枚

茲圖を故人伊能先生全國測量基線より國境郡界及び山岳河渠道路の位置を以て日維新以來諸港各縣の地圖を集め時習義塾に於て地學の先生を會し泰西の畫法を以て一國一葉を以て配り都府名邑の圖を擧げ支号するに至りて滿ちと編纂せしむるに能く其要領を得たり我邦地圖不在るを未だ是より精細なるを見ざるは諸君地理を明かにせんことを欲す購求愛觀有

江崎幸兵衛謹白

